

林業情報誌「石川の林業」

この人に聞く シリーズ

2013年5月号～2026年1月号



石川県山林協会

目 次

第1章 林業事業体・林業振興

- ・ 次代を担う若き林業従事者 ----- 1
有限会社南加賀造林 リーダー 小藤 太朗
- ・ 地道でたゆまぬ努力 ----- 2
中能登森林組合 代表理事組合長 宮本 惣一郎
- ・ (株)中野の山づくりへの取組 ----- 3
株式会社中野 取締役兼木材事業部長 吉村 兆
〃 林業経営アドバイザー 浦谷 國夫
- ・ 父子鷹 一段取りで決まる素材生産 ----- 4
中野林業 中野 敏一、中野 康隆
- ・ 集落の山、全部間伐します！ ----- 5
八日間伐事業会 代表 大松 勲
- ・ 「日本伐木チャンピオンシップ」県代表 ----- 6
金沢森林組合 加藤 一樹
- ・ 過疎山村地で苗木の生産に励む ----- 7
石川県山林種苗協同組合 副理事長 金田 喜一
- ・ 林業の循環を支える苗木生産を担う ----- 8
有限会社南加賀造林 坂下 修造
- ・ 県央農林総合事務所管内のニューフェイス ----- 9
金沢森林組合2名、横谷造林有限会社1名、石川県森林組合連合会3名
- ・ 親子二代で林業を核に挑戦する地域づくり ----- 10
株式会社 第一次産業 川上 伸、川上 仁志
- ・ 群馬から石川に移住し林業に挑む ----- 11
株式会社 山創
- ・ 令和6年能登半島地震による林道災害復旧の取り組み ----- 12
株式会社 大江設計 石川営業所 所長 古谷 治久

第2章 特用林産・里山資源

- ・ 建設業から異業種参入で原木しいたけ栽培を開始 ----- 13
北興建設株式会社 井戸谷 信男、滝上 雅義
- ・ 二代目 ～原木生産にこだわり孤軍奮闘～ ----- 14
渡津農林会 代表 水上 智紀

(注) 役職名は掲載当時のものを使用 (以下同様)

- ・ 山に目を向けてもらう取組 ～薬木・薬草類の採取販売～ ----- 15
株式会社白峰産業 取締役専務 尾田 弘好
- ・ 能登の里山で製炭業に生きる大野長一郎 ----- 16
珠洲市 大野 長一郎
- ・ 東山町たけのこの里を守る ----- 17
J A小松市たけのこ部会 副部長 吉田 達
- ・ 宝達葛の伝承 ----- 18
宝達葛生産友の会 代表 佐藤 勝治
- ・ 祖父母の出造り時代から受け継ぐわさび生産 ----- 19
白山麓わさび振興会 役員 橋本 和則
- ・ 石川をお茶炭の産地に ----- 20
能美市 安田 宏三
- ・ 白峰の伝統を守る菓子作り ----- 21
有限会社志んさ 代表取締役 織田 毅
- ・ オール輪島の輪島塗を目指すうるし掻き職人 ----- 22
輪島市【うるし掻き職人】 長平 勇
- ・ ウルシの実を活用した和ろうそく作り ----- 23
高澤ろうそく店 代表取締役 高澤 久
- ・ 地域の里山を活かした取り組み ----- 24
キノコ生産者 山本 謙一
- ・ 菌床しいたけ栽培で「加賀の星」を目指す ----- 25
社会福祉法人佛子園 ワークセンター星が岡 サービス管理責任者
宮岸 正明
- ・ 地域の恵みを詰めたクラフトジン ----- 26
つるぎ蒸溜所 代表 羽場 和宏

第3章 木材利用

- ・ 薪ストーブ、使ってみませんか？ ----- 27
株式会社通商燃料 兄後 智明、石谷 光男
- ・ 「田鶴浜建具」の伝統継承とこれから ----- 28
七尾市 岡野 繁
- ・ 木のぬくもりが伝わる手づくりの白山笠 ----- 29
石川県伝統工芸士（檜細工） 河岸 すみゑ
- ・ 木彫りでつくる加賀獅子頭 ----- 30
知田工房 知田 善博

・ 「木」の魅力で人と人を繋げる	-----	31
株式会社シモアラ 副社長 下荒 朋子		
・ 能登ヒバの魅力で木材産業を活性化	-----	32
鳳至木材株式会社 取締役 四住 一也		
・ 100年以上続く伝統工法で木の魅力を伝える職人集団	-----	33
株式会社沢野建設工房 代表取締役 澤野 利春		
・ 木は長く気も長く100年以上続く2年熟成醤油	-----	34
近岡屋醤油株式会社 代表取締役 近岡 志緒美		
・ 風土や文化に根づいた音を奏でるギターづくり	-----	35
近撥弦楽器 店主 近 信濃		
・ 薪で焼いたピッツアとこだわり雑貨の店	-----	36
もく遊りん 福江 翔太		
・ 能登の木を生かす家具づくり	-----	37
Suzu Woodworking Studio (家具職人) 辻口 洋史		
・ 石川の木を活かす木地づくり	-----	38
ホオリ (木作家・挽物木地師) 生地 史子		
・ 創業100年・タイニーハウスで新たな県産材の利用促進	-----	39
土田製材所 代表 中町 裕帆		
・ 宮大工の技を継ぐ家づくり	-----	40
株式会社済田工務店 代表取締役棟梁 済田 稚博		
・ 能登地域における唯一無二の木材チップ工場	-----	41
株式会社家村商店 代表取締役 古山 幸一		
・ 「木と布の融合で未来を織る」株式会社谷口の挑戦	-----	42
株式会社谷口 代表取締役社長 谷口 正晴		

第4章 森林利用・森づくり活動

・ 建具の町の里山整備	-----	43
まちなかり山公園づくりの会 代表 山元 広隆		
・ 森林公園に新たな魅力を	-----	44
森林セラピスト 坂本 美津子		
・ 林業応援団を増やしたい！	-----	45
もりラバー林業女子会@石川 代表 砂山 亜紀子		
・ 健やかな松林を次世代の子どもたちに	-----	46
いしかわ「能美の松原」サポートクラブ		

- ・ 千里浜海岸を守る地域住民によるクロマツ林再生活動について ----- 47
千里浜地区まちづくり協議会 会長 越野 兵司
- ・ 鞍掛山と共に歩む賑わいづくり ----- 48
滝ヶ原町鞍掛山を愛する会 会長 山下 豊
- ・ 森林公園の魅力を伝える森の案内人 ----- 49
石川県森林公園 インフォメーションセンター長 内藤 善太
- ・ 森の中の保育園で体験を通して学び育つ ----- 50
神杉保育園 園長 神杉 充

第5章 地域振興・山村振興

- ・ 地域エネルギー資源の活用を目指して ----- 51
白山しらみね薪の会 理事兼事務局長 風 一
- ・ 能登町「当目夢を語る会」の取り組み ----- 52
当目夢を語る会 会長 向峠 智隆
- ・ 小松市の基本構想は3活 ----- 53
小松市環境共生部 担当部長兼農林水産課長 山本 哲也
- ・ 地域住民の感謝を励みにイノシシの捕獲活動を行う ----- 54
輪島市【イノシシの捕獲名人】 浦 啓一
- ・ 山芋掘り35年のベテラン！ ----- 55
能登町(旧柳田村) 【山芋掘り名人】 大井 茂
- ・ キノコ採り名人 ----- 56
能登町【キノコ採り名人】 笹谷内 秀雄
- ・ ミツバチと共に50年 ----- 57
石川県養蜂組合 相談役 下橋 芳夫
- ・ 宝達山の魅力を支える「宝達山ファンクラブ」 ----- 58
宝達山ファンクラブ 代表 橘 英子
- ・ 将来の漆器産業を担う人材の育成を目指して ----- 59
公益財団法人山中漆器産業技術センター 専門員 呉藤 安宏

この人に聞く

次代を担う若き林業従事者

有限会社南加賀造林 リーダ 小藤 太朗 さん



有限会社南加賀造林で若手リーダとして活躍する小藤太朗（30歳）さんをご紹介します。

（南加賀造林は平成11年に設立され、現在は従業員9名（30代4名、50代2名、60代3名）で業務を行っています。主な仕事は、かが森林組合からの森林整備事業を請負い、高性能林業機械の保有はグラップル1台ですが、レンタルによるフォワード、トラック等で必要な機械を調達しています。

氏は17歳の時に、友人の父親の勧めで南加賀造林に就職し、下刈、枝打、除間伐等の作業に従事しました。その当時は林業への関心も薄く、独身で着の身着的ままで働いていたこともあり、このまま仕事を続けていくかどうか迷いながら働いていました。最初の転職となったのは、結婚と娘の誕生であります。一家の主としてしっかりと腰を落着け、現場作業を確実にや

ってきました。この間、国の林業施策は森林資源の充実等から搬出間伐等の木材利用へと事業が転換されたことも手伝って、会社や自分自身も利用間伐部門の仕事にシフトし、さらに間伐材の生産性を高めるため、平成23年度にはグラップル1台を追加し、高性能林業機械オペレーターを含め、会社業務の中心的な役割を担うようになりました。

次の転職は搬出間伐へのシフトに合わせて、この4～5年の間に採用された30代の若手社員の中であります。従業員9名のうち氏を含めて30代の若手が4名いるものの、仕事経験が浅く、氏のリーダとしての責務が大きくなっていることであります。

このため、地主等とのトラブルや現場作業で事故が起きないように、これまでの自身の仕事上のミスや労災に係る事故報告等の事例を題材にし、若手従業員の教育指導に当たっています。

また、氏は人が財産であり、従業員の全てが生活できるようにしていく義務があると思っ

ています。高性能林業機械を活用しながらの仕事は魅力を感じる一方、従来システムより何倍も仕事をこなす高性能林業機械はこれまでより人手を必要としないことから、従業員の仕事配分と作業部門の配置が重要と考えられています。例えば、1台の機械を1人の専用車両とせず若手社員が全員、操作できるようにマルチの人間を育成していきたいと考えています。

社長からは、会社経営の中心人物として期待されており、今後、責任ある立場として林業・木材の専門的知識や会社経営の勉強も含め、さまざまな分野の人からの教えを学んでいきたいと意気込みをのぞかせています。

氏の当面の目標は、今年度のグラップル、フォワードの導入であり、森林の持主がいいと思ってくれるような仕事の仕上がりになりたいとの強い思いを抱いています。

今後の氏と若手林業従事者皆様のご活躍を期待しています。

（南加賀農林総合事務所森林部）

この人に聞く

地道でたゆまぬ努力



中能登森林組合 代表理事組合長 宮本惣一郎さん

中能登森林組合の代表理事組合長に就任された、宮本惣一郎さん宅にお伺いしました。氏は元県議会議員として森林環境税の創設に寄与されるとともに、カキ養殖やサカキ(真榊)栽培を行うなどバイタリティにあふれた方です。

中能登森林組合は合併から4年経過しましたが依然として経営状況が厳しく、職員を雇用していくのが精いっぱい状況です。農協などと違って金融や保険などの信用事業が無いため、経済活動力が弱い財務体質になっています。

宮本惣一郎さん 宮本惣一郎さん 宮本惣一郎さん 宮本惣一郎さん 宮本惣一郎さん 宮本惣一郎さん 宮本惣一郎さん 宮本惣一郎さん 宮本惣一郎さん 宮本惣一郎さん

ご自身の森林への関わりは生まれ育った七尾市中島町小牧は天然の入り江となっていて、古くは木材運搬(現在はカキ養殖)に適した所です。往時は植林が盛んで、祖父から梅雨の頃にはアテの直挿しをさせられたものです。

祖父の口癖は「漁師は1日、百姓は1年、山持ちは50年」と、米や野菜と違って立木から収入を得るためには、長い年月とたゆまぬ努力が必要だと教え込まれました。

その教えが講じたのでしょいか、20年前から試行錯誤で始めたサカキ栽培が軌道に乗ってきました。

お宅へ訪問してのインタビューでしたが、ご自宅の庭や周辺の山にはいたるところにサカキが植えられていました。今年も間伐跡地に1,000本の苗木

採取や出荷はアルバイト2名を雇って対応していますから、地元の雇用も生まれたので「能登の葉っぱビジネス」ですかね。

を植栽するそうです。山の整備とその林内を利用するサカキ生産から、地道でたゆまぬ努力の持ち主の方だと思いました。中能登森林組合の経営トップとしても今後の手腕に大いに期待しています。(中能登農林総合事務所森林部)

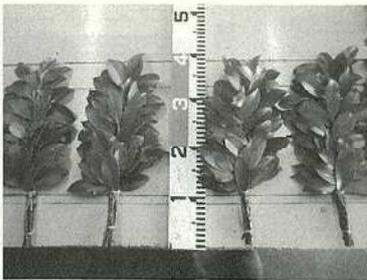
新組合長としての抱負は中能登森林組合は合併から4年経過しましたが依然として経営状況が厳しく、職員を雇用していくのが精いっぱい状況です。農協などと違って金融や保険などの信用事業が無いため、経済活動力が弱い財務体質になっています。

その教えが講じたのでしょいか、20年前から試行錯誤で始めたサカキ栽培が軌道に乗ってきました。

お宅へ訪問してのインタビューでしたが、ご自宅の庭や周辺の山にはいたるところにサカキが植えられていました。今年も間伐跡地に1,000本の苗木



スギ林のサカキ栽培



出荷するサカキ

この人に聞く

(株)中野のEびくりへの取組

取締役兼木材事業部長 吉村 兆さん・林業経営アドバイザー 浦谷 國夫さん



浦谷國夫(左)さんと吉村兆(右)さん

ーン付きトラックと連結型フルトレーラーを購入し、平成18年から原木の運搬も始めており、山土場での原木購入・直送も行っていきます。

(株)中野は昨年10月に穴水町と七尾市にまたがる約740haの山林において、森林経営計画(属地)の認定を受けました。同社の取締役兼木材事業部長の吉村兆さん、同社社員で林業経営アドバイザーの浦谷國夫さんにお話を伺いました。

森林経営計画を立てることになったいきさつを教えてください。

当社は志賀町高浜町に本社を構え、建築資材・住宅設備など住宅関係全般を取り扱う会社ですが、林業専用トラックル

以前から素材生産にも取り組みたいと考えていましたが、平成23年に初めて北越紀州製紙(株)の材を山土場買いたことがきっかけで、森林経営計画を進めることとなりました。北越紀州製紙(株)は能登地域に約1,000haの社有林を所有しており、このうち約840haが穴水町内にあります。森林施業計画制度から森林経営計画制度に移行することから森林経営計画の策定を勧めたところ、それなら(株)中野に任せたいと委託されました。それからすぐ北越紀州製紙(株)の穴水町社有林を中心とした計画作成に着手し、県森林管理課の指導のもと、一年かがりで認定までこぎ付けました。

現在の素材生産の状況は。

今年度は補助事業を活用してハーベスタとフォワーダを導入し、20haを目標に間伐を進めています。8月上旬までに5haの間伐を終え、約260m²の間伐材を搬出しました。材は自社用のほかに、林ベニヤ産業(株)七尾工場、(協)能登木材総合センター、(株)輪島チップセンターなどに出材しています。来年度は間伐目標面積を80haとしています。

今後の展望を教えてください。

今年度は初年度のためいろいろ試行錯誤の中で行っています。が、真っ直ぐで節の少ない良材は木材市場や製材工場行き、やや曲がり・節等のある材は合板工場、それ以外の材はチップ用といったふうに、少しでも高く売れるよう山土場で細かく仕上げを行い、そこから販売先へ直送し、できるだけ運搬コストを抑えることを徹底しました。

森林が分散せずまとまっております、トラックが通れる道も近い

という立地条件の良さもあり、間伐5haで補助事業を活用して約130万円、木材1m³当たり約5,000円を所有者に還元することができました。今後は販売先の納材規格に対応した木材の仕分け技術の向上や新規販売先の開拓などを進め、所有者に1円でも多く還元できる体制を整えていきたいと思っています。また、団地周辺の森林所有者へ働きかけ、森林経営計画の対象面積の拡大を図るとともに、間伐材などの素材生産から運搬製材品、住宅建築までの一貫した取り組みをさらに進めていきたいと考えています。能登地域の新たな林業の担い手として、県産材のさらなる利用推進に貢献できるようにできれば幸いです。

北越紀州製紙(株)は全国に社有林を所有していますが、民間事業体に森林経営計画を任せられているのは(株)中野だけです。民間ならではの機動力で山づくりに取り組み始めた同社の今後の活躍に期待しています。

(奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

父子鷹 一段取りで決まる素材生産

中野林業 中野敏一さん、中野康隆さん



(父) 敏一さん：左 (子) 康隆さん：右

今回は、南加賀地域で精力的に素材生産を営む、中野林業さんにお話を伺いました。

会社の設立は？

父の敏一さんは、平成3年までは林業とは全く関係のない仕事に従事していましたが、ご縁があり、平成4年より育林作業に従事することとなりました。その後、平成8年には中野造林を設立し、平成21年に中野林業と改名をいたしております。

独立してからは、当時の森林組合長のすすめもあり、グラッ

ブル2台を借り受け、育林作業から素材生産へと仕事をシフトしました。その後は順次、フォワーダ、グラップル、プロセッサを導入し、着実に機械化を進めていきました。

子の康隆さんは、平成10年に高校を卒業した後、父の仕事に従事しましたが、間伐現場での高性能林業機械の取扱いや伐木造材に対する技術不足を痛感したことから、平成18年から3年に亘り、富樫林業等に出向き、技術習得の修業に努めました。平成21年には父子が再びタッグを組み、現在に至っています。生産システムは？

現在、作業員は5名で、素材生産はグラップル4台、プロセッサ1台、フォワーダ2台の高性能林業機械を独自の手法の下で、効率的に組み合わせたシステムで行っております。段取りは、まず全員で山に入り、作業道の線形(200m/ha)と選木の踏査をします。

次に、作業道の開設、人力伐倒、グラップルによる木寄せ、プロセッサによる造材、グラップルによる積み込み、フォワーダによる集材、市場への運搬について担当が決められ、各々が作業分担を行うこととしております。

一つの目標であります。加えて、人材の育成確保が必要となっております。現在はプロセッサによる造材は父の敏一さん1人の対応となっていることから、早く後継者を育てたいと考えています。

仕事の苦勞や課題は？

南加賀の山は雪が多いため、伐採立木の形状がS字性に曲がっていることが多く、目標としているA材・B材の出材が確保できない場合もあることから、もっとC材の搬出を考えることが必要であります。

また、効率良く仕事を進める段取りをするには、全体を見渡し、掌握できていることが必要であり、康隆さんの現任務が重要性を増しております。

また、機械化林業を進め、各々の仕事分担を明確にし効率性を高めたところ、土場での集積量が多くなる一方、トラックの保有関係から土場と市場の運搬がネックとなっております。

ありがとうございます。時として、仕事の段取りなどで父子で意見の食い違いもあるということですが、お互いに補いながら、熱意をもって仕事に取り組み姿勢は十分に伺えました。

今後の目標は？
現在の生産性は、おおよそ8m/人・日であるが、これを10m/人・日まで引き上げるのが

ありがとうございます。今後も、研鑽に励み、作業の効率化及びコストダウンを図り、地域林業の活性化に向けて更なるご活躍を期待しております。

(南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

集落の山、全部間伐します！

八田間伐事業会（七尾市八田町）代表 大松 勲さん



七尾市の八田町では平成25年6月から集落全体の山を間伐する計画で事業が進められています。

八田町の山林は全てで77haあり、52名の森林所有者が存在しますが、ここを集約化した世話人を務める代表からこれまでの苦労やこれからの展望をお聞きしました。

集約化へのきっかけ

平成25年2月に中能登森林組合の林業座談会で間伐事業の説明があり、その時に集落全体のまとまりがなかったら間伐事業は進まないと思いました。

特に、個人個人の境界など考えていたら道も出来ないし収益の分配などトラブルの原因をつくるだけです。

何とか集落が一体化して間伐事業に取り組めないかと考えた末、既存の営農組合の組織を活

かした会を立ち上げ、個人境界の確定や事業剰余金の個人配分は行わないことを決め、森林組合に協力を求めました。

森林組合や県には、現地踏査や森林経営計画の樹立、事業説明など多くの面で協力を頂き大変感謝しています。

昭和20年生まれで子供の頃はよく杉苗を担ぎ植林を手伝わされました。今、その杉の木を間伐しないまま今後五年、十年先のことを想像すると、山に入ることすら体力的・気力的にも無理になってくる可能性が高いと思われま

そうなれば次の世代に山の管理を任せなければなりません、植えた本人でさえ出来ない間伐を、次の世代に押し付けることなどできません。

森林の関係者が一致協力して間伐を進め、その後の管理・運営については次世代につないでいくのが、私たち団塊世代の責

任でもあり義務を果たすことにもなると考えています。これからは定年退職して遊んでいたいけど、遊ばれない人ってかなりいますからそんな人にもっともっと活躍してもらおうという仕掛けづくりを考えていこうと思っています。

第2期は新ルートの作業道

平成25年度は814㎡（8.26ha）の間伐材を搬出しましたが、集落内を通る道路しか利用できなかったことから至る所に損傷が発生しました。

住民の多くの人から間伐事業に対する批判が寄せられ、一時は事業中止の議論も噴出するほどでした。

このため、次年度は集落を迂回する新たな作業道を計画し、将来に向け汎用性のあるものと計画を修正中です。

将来は山を周回する基幹的な作業道に整備して、誰もが山へ関心を持つことのできるようにしたいと思っています。

最後に山への思いお聞きしたら、有名な詩で返して頂きました。

「ふるさとの山に向いて言うことなし ふるさとの山はありがたきかな」

△石川啄木▽

集落の山への愛着と将来の姿を夢見て粉骨砕身の努力をなされている氏の活動を今後とも応援したいと思います。

（中能登森林総合事務所森林部）



こ の 人 に 聞 く

「日本伐木チャンピオンシップ」県代表

金沢森林組合 加藤 一樹さん



競技中の加藤さん

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、「日本伐木チャンピオンシップ」と言う林業技術を競う大会が

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、5種目の合計点数で順位が付けられます。伐倒競技は、準備された長さ6mの木を決められた方向へ正確に、安全に倒す競技です。

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、5種目の合計点数で順位が付けられます。伐倒競技は、準備された長さ6mの木を決められた方向へ正確に、安全に倒す競技です。

日本ですべて開催されました。この大会は9月にスイスで開催される世界大会に出場する日本代表選手を選出するために行なわれたものであります。

今回この大会に県代表として参加し、7位という優秀な成績を収めた金沢森林組合の加藤一樹さんにお話を伺いました。

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、5種目の合計点数で順位が付けられます。伐倒競技は、準備された長さ6mの木を決められた方向へ正確に、安全に倒す競技です。

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、5種目の合計点数で順位が付けられます。伐倒競技は、準備された長さ6mの木を決められた方向へ正確に、安全に倒す競技です。

出場内容？

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、5種目の合計点数で順位が付けられます。伐倒競技は、準備された長さ6mの木を決められた方向へ正確に、安全に倒す競技です。

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、5種目の合計点数で順位が付けられます。伐倒競技は、準備された長さ6mの木を決められた方向へ正確に、安全に倒す競技です。

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、5種目の合計点数で順位が付けられます。伐倒競技は、準備された長さ6mの木を決められた方向へ正確に、安全に倒す競技です。

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、5種目の合計点数で順位が付けられます。伐倒競技は、準備された長さ6mの木を決められた方向へ正確に、安全に倒す競技です。

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、5種目の合計点数で順位が付けられます。伐倒競技は、準備された長さ6mの木を決められた方向へ正確に、安全に倒す競技です。

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、5種目の合計点数で順位が付けられます。伐倒競技は、準備された長さ6mの木を決められた方向へ正確に、安全に倒す競技です。

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、5種目の合計点数で順位が付けられます。伐倒競技は、準備された長さ6mの木を決められた方向へ正確に、安全に倒す競技です。



参加者全員

今年、枝払いの5種目でおこなわれ、青森県で各種目ごとに決められた点数からの減点方式で点数がつけられ、5種目の合計点数で順位が付けられます。伐倒競技は、準備された長さ6mの木を決められた方向へ正確に、安全に倒す競技です。

この人に聞く

林業の循環を支える苗木生産を担う



有限会社南加賀造林 坂下 修造 さん

の森林整備に取り組み事業体ですが、元社長の坂下修造さんは4年前に苗木生産者の資格を取得し、現在は社長職を若い後継者に任せ、苗木生産に専念されております。

今回は苗木生産者としての坂下さんの思いをお伺いしました。
 ○苗木生産の取り組みのきっかけはどのようなことでしたか
 会社の作業員の一部高齢化や、冬から春先にかけての積雪による仕事量の減少への対策を検討していた中、平成25年に県が松くい虫被害地への植栽木として抵抗性クロマツの需要増を見込んだ生産者養成研修を行うことを聞きました。ちょうど自宅横に空き地があり、海岸にも近い

有限 ことから苗木生産に取り組んでみようと考えました。
 加賀造 抵抗性クロマツについては、林は間伐や作業道作 今年度のコンテナ苗を4千本から来年度は6千本に増やそうと頑張っています。現在は、抵抗性クロマツのコンテナ苗だけでなく、少花粉スギ、桑島スギ、日用スギ、そしてヒノキやアテのポット苗にもチャレンジしています。



少花粉スギ苗 (さし木)

○どのような点にご苦労されていますか。

夏の乾燥時期の水分管理は苗木の生長に大きな影響を与えるので、この時期の灌水作業が一番大変です。

また、コンテナ苗の培養土にはヤシ殻を使うのですが、根切り虫が発生するため粒剤を散布します。しかし、培養土の露出部分が狭いため、粒剤がなかなか苗木全体に行き届かず、苗木を枯らしてしまうことがあります。根切り虫対策として、苗木を適正に管理するためのビニールハウスを自己資金で1棟建てましたが、あと2棟くらいあると助かりますね。

苗木生産は2年後3年後の需要を見越して生産を開始しますが、出荷時に計画どおりとならず残苗となることがあり、県・



マツノザイセンチュウ接種後の抵抗性クロマツコンテナ苗 (2年生)

森林組合等の情報収集が大事だと感じています。
 ○これからの苗木生産に対する抱負をお聞かせください
 山は、木が成長して適度に伐る時が来たら伐採、更新し、若返らせることが大事だと思います。植栽木は太らせ続けても売値が上がりが続けるわけではなく、伐つて植えていくべきだと思いますし、それに伴い苗木の需要も出てくると思います。

また、これからの育林については、特に地拵えや下刈りなどの作業について、きれいにすることを心がけるのではなく手間や経費をかけないことも大事であり、そのことにより再造林の理解も得られると思います。そして、このようなことを含め、これからの林業を担う人材の育成に力を入れることが必要だと思えます。これからの行政の施策に期待いたします。
 (南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

県央農林総合事務所管内のニューフェイス

令和3年度に新たに県央農林総合事務所管内の事業体に就業された方々6名を紹介いたします。

①金沢森林組合

藍原 伴治郎さん



前職は彫刻師で、欄間や獅子頭を彫っていた藍原さん。木材業界に興味があり森林組合宮野工場に転職し、現在は、木材加工の最終工程となるフローリングや木材製品の仕上げ部門を担当。「原木から各加工の担当者を経て製品を仕上げるというチームでの仕事に、やりがいを感じています。先輩方を見習い早く一人前になることが目標。とにかく木が好きなので山の現場も見たいです」と藍原さん。

高野工場長は、「10年ぶりの新規採用者。今後の工場を背負ってほしい」と期待しています。

②金沢森林組合

府中 駿平さん

高校では相撲に打ち込んでいた府中さんは、高校卒業後に一度製造業に就きましたが、体力を活かしたい



と友人2人が働いている金沢森林組合に転職しました。府中さんは、「面倒見の良い先輩や同級生がいて、日常では経験出来ない仕事が出来ることがこの仕事の魅力。負けず嫌いなので、自分に負荷をかけ先輩を越えられるよう毎日仕事をしています。後輩の手下にも早くなりたいです」と抱負を語っています。

③横谷造林株式会社

行上 淳一さん



行上さんは、大切な森の整備に貢献したいと一念発起し、建設業から林業に転身を考えて、友人の紹介で横谷造林に入社。「前職の建設業と比べると仕事はキツイが、自分の仕事で社会や森を良くすることに役立つことを実感できます。会社でいろいろな資格を取

新田金沢支所長は、「技術もしっかりとしているし体力もある。早く現場のリーダーになって欲しい」と期待を寄せています。

らせてくれるので、林業を勉強し早く期待に応えたいです」と行上さん。後藤社長は、「先を読んで動いてくれるし、コミュニケーションもしっかり出来る。後は、林業の技術を一つずつ身に付けていって欲しい」と期待をかけています。

④石川県森林組合連合会

羽根木 翔悟さん



中学高校とサッカーに燃えていた羽根木さんは、体を動かす仕事がしたいと高校の先輩が働いている県森林組合連合会に就職。「林業は技術が必要な仕事。初めはチェーンソーで木を倒すことだけで精一杯だったが、今では、集積をイメージし狙った方向に倒せるようになった。技術が身に付いていくことが楽しい。早く先輩に追いつき戦力になりたいです」と羽根木さんは意気込んでいます。

⑤石川県森林組合連合会

山根 拓馬さん



山根さんは、幼いころの森林組合のイベントがきっかけとなり林業に就くことが将来の夢となったとのこと。「高校生の時、インターンシップで県森林組合連合

会にお世話になり、ここしかないと思いました。採用通知をもらったときは、幼い時からの夢が叶い最高に幸せな気分でした。今も毎日が充実しています。早く技術を身に付け、安全にも気を配りながら、戦力になりたいです」と山根さん。

上司の西嶋さんは、「暑さに負けずよく頑張ってくれている。若い2人の成長がとても楽しみ」と目を細めています。

⑥石川県森林組合連合会

谷内 秀昭さん



谷内さんは、主に木材共販所や山土場での原木の運搬を担当しています。「木の香りや自然、機械操作が好きでこの職を選んだ。好きな木に毎日触れることが出来て毎日が楽しい。重機や運搬車、チェーンソーも使うので安全には特に気を配っています。今後は、はい作業主任者の資格取得にも挑戦したいし、広葉樹の樹種も憶えたいです」と谷内さん。

上司の泉さんは、「努力を惜しまず向上心を持って取り組んでいる。木材流通の一翼を担って欲しい」と大きな期待を寄せています。

林業・木材産業の振興に向けて、皆様のご活躍を期待しています。
(県央農林総合事務所森林部)

この人に聞く

親子二代で林業を核に挑戦する地域づくり

株式会社第一次産業

七尾市を中心に林業（素材生産や特殊伐採等）から農業まで営む「株式会社第一次産業」の創業者である会長の川上伸さんと、その経営を引き継いだ娘婿の川上仁志さんにお話を伺いました。

〈川上 伸さん〉

1 会社の設立経緯

元々は郵便局に勤めていたが、やりがいを感じられずにいたところ、当時の中島町森林組合の参事に誘われたことをきっかけに会社を設立した。当時は、京都議定書が発効されて森林による二酸化炭素の吸収への期待が高まり、これからは林業が盛んになると考えた。

ただ、やはり林業だけでは厳しく、農業にも幅広く取り組んだ。あの頃は、機械で稲刈りなどを請け負うことが珍しく需要もあった。

2 転機

当初は、間伐した丸太が細く搬出量も多くなかった。伐った木は林内作業車を使って搬出していたが、転機となったのは平成21年にハーベスタを購入したこと。補助金と借金などで費用を工面して入手した。

その後の支払いも大変だったが、当時、ハーベスタは県内でも数台し

か稼働しておらず、また能越自動車道開設の伐採などの仕事もあり重宝された。維持管理費が高むので大変だが、機械がないと仕事にならない。今では、ハーベスタ2台、グラブブル4台、ザウルス、グラブブルン1、フォワーダ、クローラ各1台を所有している。

ハーベスタは、オペレーター付きで他の事業体へも貸し出している。地域の林業振興のため、事業体間で協力していくことも大切だと思う。

3 今後のこと

どれだけ機械があっても、やっぱり



七尾市多根町の伐採現場にて
川上会長（中央）、仁志さん（左端）と社員の皆さん

現場で働いてくれている社員が一番大事。苦勞してもらっているからね。給料を上げ、ボーナスも出してあげないといけない。大きな会社では、毎年給料が上がるのが当たり前だからね。

さらに、今後は外国人の雇用もあり得るのかなと考えている。市内では、自動車整備など技能実習生が様々な業種で働く姿を見る機会が増えてきた。コミュニケーションが難しいのは、日本人でも外国人でも同じだから、草刈りができれば受け入れたいよ。

〈川上 仁志さん〉

4 会社を継いだきっかけ

前職はサラリーマンで転勤が多く、また、大きな組織の中では自分の思いが伝わらずに熱意が削がれてしまうことも多々あった。

そのため、地域に腰を据えて、小さくても自分の思いが伝わる仕事をしたいと思い、結婚を機に転職した。長く続ける自信もあり、不安はなかった。

5 第一次産業の強み

やはり、機械を多く所有していることで、いろいろな現場に対応できること。自社の4トン車でフットワークよく運搬できる小型のグラブブルは稼働率も高い。それに、間伐など森林整備の仕事だけではなく、特殊伐採の仕事も増えてきた。

個々人のスキルも上がっているこ

とも美

感じていて、規模の大きな伐採も出来るように

なってきた。農業分野では、

稲刈りの他にもドローンでの農薬散布をJAから委託され、地域の核になっている。

6 今後の目標

林業の担い手の確保のためにも、もっと木材の価値を上げていく必要がある。ただ、それを時代に任せるのではなく、自分たちで付加価値を付けて上げていかないとけない。

そのためには、林業の六次産業化を進めていければと考えている。地域の製材工場などを巻き込んで、丸太を加工し、自分たちで販売していくことなど、林業をベースに新しいチャレンジをしていきたい。

〈編集後記〉

お二人への取材では、これまでの様々な決断や、地域の林業の明るい姿への思いに触れることができました。今後益々のご活躍を期待しています。

（県中能登農林総合事務所森林部）



七尾市中島外原町の間伐現場にて

この人に聞く

群馬から石川に移住し林業に挑む

株式会社山創

素材生産等を行う株式会社山創（金沢市）に、群馬県から令和5年2月新たな仲間2人が加わりました。秋風が爽やかな10月初旬、金沢市坪野町の皆伐現場を訪ね、お二人にインタビューしました。

◇水出 力さん 30歳

生まれは、群馬県吾妻郡長野原町です。民主党政権下で一旦中止に追い込まれたハツ場ダムで、有名になりました。元々大工を目指していましたが、高性能林業機械の操縦にも興味があったので、群馬県上野村の林業事業体に就職しました。ベテランの方々に、丁寧な指導を受けながら技術を身につけ、日本伐木チャンピオンシップ（伐木技術を競う大会）にも出場するようになりました。

この大会の競技者として、株式会社山創の戸田守社長や浅地重嘉*さんと知り合いましたので、約10年のお付き合いになりますが、最近は、競技から離れています。

この競技は、あくまでも現場で磨いた術を発揮する場所だと思ってお

り、競技に没頭するあまりに本業が疎かになつては、林業の発展に繋がらないからです。

この考え方は社長とも一致していて、私が社長の下で働きたいと思えた理由の一つでもあります。



伐倒方向を見極める水出さん

◇近江 一朗さん 31歳

生まれは群馬県館林市、県の東南部に位置し鶴舞う形の頭の部分になります。神奈川県大学の大学を2年で中退し、その後2年間はフリーターをしていました。

林業就業へのきっかけは、現場仕事に興味があったことから参加した

林業の新規就業支援講習です。

ここで、群馬県職員からの紹介で県内の林業事業体に就職しました。そこでは、水出さんが既に働いていました。私は年上ですが、仕事では水出さんが先輩になります。チェーソナーは、水出さんやベテランの方々にしっかりと指導してもらいました。技術が身につくにつれて年が離れた先輩の下を離れ、自分の力を試してみたいという思いが強くなってきました。

そんなとき水出さんが、石川県の林業事業体へ行くというではありませんか。必死で頼みましたよ。社長に、俺も一緒に雇って欲しくないか頼んで欲しいと。

私のいた事業体ではスイングヤーダーでの集材も一般的でした。道の開設にこだわらず、ワイヤーでの集材に挑戦したいですね。



伐倒直後、愛機とポーズをとる近江さん

戸田社長は、2人の加入について、

「確かな技術を持った人材の加入で助かっています。古参の浅地とも喜んでいるところです。これを契機として、ハーベスターの追加導入にも踏み切りました。どんどん県産材を出して会社をひとまわり大きくしたいですね。」と語ってくれました。

*浅地 重嘉 44歳

戸田社長とは16歳で知り合い、創業時から社長の右腕として苦楽を共にしてきた社員。



左から水出さん、浅地さん、戸田さん、近江さん

県央農林総合事務所森林部としては、昨年から機械導入や移住就業者の受け入れについて相談を受け、微力ながら応援してきましたので、(株)山創の発展を心より祈念しながら、最後に安全作業をお願いし、現場を後にしました。

(県央農林総合事務所森林部)

この人に聞く

令和6年能登半島地震による林道災害復旧の取り組み

株式会社大江設計 石川営業所 所長 古谷 治久 さん

○(株)大江設計の概要

当社は、昭和51年に設立され、本社は宮城県仙台市にあります。

主な業務内容は、公共事業に関する調査・設計、都市計画、農林業計画など、民間分野では各種開発計画の支援をはじめ、敷地造成計画などを実施しています。

近年は、頻発する自然災害の対応のため、宮城県内のみならず他県からの要請により災害の調査・設計も実施しています。

○令和6年能登半島地震による被害

対応の経緯

令和6年1月1日に発生した能登半島地震の際には、東日本大震災における災害調査・設計で、全国から多大なご支援をいただいた(一社)宮城県測量設計業協会(会長：(株)大江設計代表取締役 高橋淳市)から、(一社)石川県測量設計業協会に対して支援を申し出ました。

また、石川県に対しても支援を申し出て、後日、県より当社に林道災害の調査についての協力依頼があったことから、石川県での拠点を七尾市に設けて体

制を整えました。

被災を受けた県内の林道の調査結果を受けて、奥能登農林総合事務所管内の4市町の被害が甚大であることが徐々に判明し、同管内の林道施設災害の調査・設計を担当する方針を決定しました。

○調査・設計の対応状況

令和6年3月から、宿泊施設を石川県内で確保することが困難であったため、富山県高岡市に宿舎を確保し、まずは被害調査と降雪の影響の少ない林道の調査に着手しました。

また、石川県山林協会が、(一社)日本治山治水協会等を通じて全国の会員協会に応援を要請し、申し出の

あった森林協会等11団体のご協力をいただき、4月から現地の調査・設計に順次着手しました。

5月からは、宮城県測量設計業協会と静岡県及び島根県のコンサルタント会社から14社のご協力をいただき、合計25者による調査・設計チームにより、日々業務を遂行しています。

現在は、輪島市、珠洲市、能登町、穴水町の約180路線において調査・設計に取り組んでいます。被害が相当甚大でありかなり苦戦をしています。

○現場状況・問題点・技術的課題

当面、林道施設災害の査定申請をするための簡易査定資料を作成していますが、路線によっては起点若しくは終点から歩いて2時間以上かかるなど、調査の進捗が大幅に遅れるケースも出ています。

調査は、レーザードローン計測を



林道寺山線の被災状況



レーザードローン計測



MMS計測

中心に進めていますが、林道の上空が立木により鬱閉して計測できない場合は、ハンデイスキャナーを装着し徒歩により調査を実施しています。

また、仮復旧により通行が可能になった路線や路面のみの被災箇所については、モバイルマッピングシステム(MMS)を搭載した計測車輜での調査を実施しています。

これらの調査が進むにつれて被害の大きさが明らかになり、林道上に発生した大崩壊や土砂ダム、地すべりなどの箇所の対策、他所管との調整、査定実施後の採用工法の検討など、今後、検討する課題は山積していると考えています。

○今後の取り組み

まずは、災害査定を受けることにつきますが、実施設計においては、詳細な測量を実施するための調査体制の構築を、工種・工法の検討においては、資材の供給体制(特にコンクリート)や運搬経路、運搬時間、仮設工など、多岐にわたり検討する必要があると考えています。

また、林道施設の災害復旧が進み、奥能登地域の林業・木材産業を回復し、生業の再建を図るため、今後、当社では地元自治体とともに関係団体の方々との意見交換をしながら、一日も早い復旧・復興の取り組みに取り組みでまいりたいと思います。

(奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

建設業から異業種参入で原木しいたけ栽培を開始

北興建設株式会社 井戸谷信男さん、滝上雅義さん



滝上 雅義さん(奥)と
井戸谷信男さん(手前)

北興建設株式会社は、昭和54年に創業した建設業者で、平成20年から河北潟で農業に参入し、現在3.6haの農場で露地野菜(すいか、キャベツ等)を栽培しており、昨年からは原木しいたけの栽培を始めました。今回は担当の井戸谷さんと滝上さんを訪ねてお話を伺いました。

これまでの仕事と全く違う分野への参入に抵抗はありませんでしたか？
会社の意向で、農業担当になりましたが、それまで全く未経験で、最初はやはり不安がありました。

しかし、収穫の喜びを感じる

ことができ、収穫物が高値で売れたときは、やりがいを感じます。

しいたけの栽培を始めたいきっかけは？

出身地の珠洲市で、しいたけ栽培をしている親戚や友人がいることから、関心を持ち、畑の一角で昨年からは栽培を始めました。平成24年の春に原木500本に初めて植菌し、12月に初めて収穫がありました。原木は、能登産を友人から購入したり、本業の建設工事で出る物を使っています。

河北潟でのしいたけ栽培で苦労することはありますか？

冬場の風が強いこと、夏の日差しの強さに苦労します。

強風に対しては、ほだ場を防風ネットですべて対処しています。

また、夏の日差しに対しては、遮光ネットと、散水で対処しています。種菌メーカーの技術者も、こんなところでしたいけが出来るのかと驚いています。

今後の計画を教えてください。
今年の春も原木500本に植菌しました。今後も原木を増やしていく予定であり、2,000本を保有しつつ栽培を続けていこうと思っています。

また、現在は露地栽培ですが、雨子が多くなるので、栽培用のビニールハウスを建設する計画を立てています。

また、共販より高収入が期待できる地元スーパーでの産直販売に、現在の農産物にしいたけを加えることで収益の増加を見込んでいます。

会社としても、農業分野へ力を入れるべきだと考え、キャベツ、すいかとともに、原木しいたけを3本柱として事業を推進する予定です。

ありがとうございました。

事務所としても、農業分野と連携して支援していきたいと思っています。

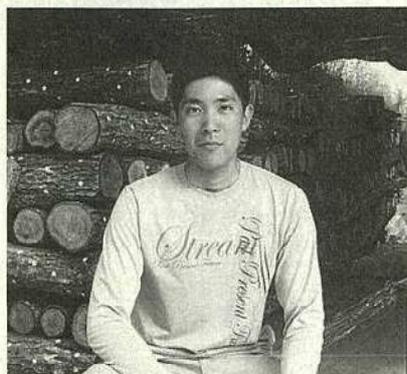
今後の生産量増加、収入増加に期待します。

(県央農林総合事務所森林部)

この人に聞く

二代目く原木生産にこだわり孤軍奮闘く

渡津農林会 代表 水上 智紀さん



白山市渡津町にある渡津農林会では、30年以上のこの生産を行ってきた。平成22年に父から代表を引き継ぐことになり、現在、生産基盤の充実に合せ、キクラゲ、マイタケ、ナメコ、シイタケの4品目を主力とした生産経営を行っている。

今回は、代表の水上智紀（34歳）さんに、現況や今後の展望についてお話を伺いました。きのこ生産を引き継いだきっかけは？

小さい頃から、父のきのこ生産を手伝っていたことや、渡津地区の豊かな自然環境とキノコ料理がとても好きであったことが縁となり、自分で作ったきのこ

こを、沢山の方に食べて欲しいとの想いから、二代目として引き継ぐ事を決意しました。生産から販売の状況は？

最初は、お客さんに新鮮なキノコを食べて貰いたいとのことから、直販所での販売に力を入れていきましたが、今は、金沢中央卸売市場や、カジマートなどの量販店にも出荷するようになっていきます。

菌興115号を使った生シイタケを「鳥越115」として出荷していますが、「のと115」など他のブランドしいたけに比べて販売単価の面で、大きく水を開けられているのが現状です。

また、石川県内には生産量の少ない「原木キクラゲ」の生産にも取り組んでいます。雪深いこの地域では、思った以上に栽培が難しく、伏せ込んであるホダ木がひと冬越すことが出来ず、収穫は1シーズンと短いなど、目下、試行錯誤の状況であります。

販売商品は「鳥越きのこ」の独自ステッカーを貼ったの差別化や、調理レシピ・保存の方法

などを解説する小チラシの添付などいろいろなサービス努力をしています。

今後の展望について

昨年新たに主力の4品目キノコの生産目標を立て、先ずは原木シイタケ用の発生舎を増設しました。キクラゲは、まだまだ試行錯誤している点がありますが、4品目すべてが安定生産できる技術力を確立させることを優先したいと考えております。

また、きのこ栽培の繁忙期以外の副収入源として期待の大きいブルーベリーの栽培試験を行っております。

さらに地域の有志でつくる「ほたる保存会」の副会長を務め、環境保全活動にも尽力しており、シーズンになると、毎晩10台程度の車がほたる見物に入ってきてます。将来を見据え、自然豊かな渡津地区の栽培きのこやブルーベリーの収穫体験を通じて、ブランド力を高め、商品の差別化を図っていく強い気持が感じられました。斬新なアイデアを生かした、同会の今後の活躍に期待しています。

（石川農林総合事務所森林部）

この人に聞く

山に目を向けてもらう取組
薬木・薬草類の採取販売

(株)白峰産業 取締役専務 尾田弘好さん



白山市白峰にある(株)白峰産業は、創業51年の森林整備事業を

中心とした造林業を営んでいますが、数年前から山に目を向けてもらう取組の一環として、薬木・薬草類の採取から販売を手がけています。

今回は、取締役専務の尾田弘好(51歳)さんに、取組のきっかけや現況についてお話を伺いました。

薬木・薬草類の取組状況を教えてください。

4年ほど前から、森林にある未利用な薬木・薬草類(主に漢方薬の原料として)を採取・栽培・加工・販売まで行っています。弊社は昔から、炭・なめこの製造・加工・販売は行っていました。薬木・薬草類は初めての取組です。

今扱っているのが、スギ、ホウノキ(コウボク)、キハダ、ヨモギ(ガイヨウ)、クロモジ(ウシヨウ)、ミズメザクラ、ニオイコブシで、これらは山林に入っ

て採取します。

また、畑では金沢大学の薬学部の人たちと共同で、白峰の気候に合う薬草類を栽培しています。今栽培しているのが、カノコソウ、フジバカマ、ワハツカシヤクヤク(ボンテン)、センキユー、ミヤマトウキ、エゾノレニンビソウ、サフランです。大きく分けて採取と栽培の2通りで行っています。

山で採取する薬木類は、時には急傾斜地を上ったり下りたりで、かなりの重労働です。畑で栽培する薬草類は、何と

言っても草むしりです。我々の得意分野の刈払機は使えません。全部手でむしります。

どちらも初めての取組みで本業(造林業)との両立もありなかなか大変です。

どうして薬木・薬草の採取・栽培に取組んだのですか?

山の(白峰の)価値観を高めたいという思いがあります。

薬木・薬草類は、除間伐の際に伐採されたまま林内に放置されている場合が多いのですが、少しの手間を掛けることによっ

て、僅かですが収入に繋がる事が解りました。

また、このような取組が広がる事によって、少しでも山の手入れが進めば、山の環境が改善されて行くと思っています。

ここからは、一部個人的な目論も入りますが、現代社会で蛇口をひねれば当たり前のように水が出ます。毎日、米も炊ければ風呂にも入れます。

しかし、これらは山から流れ出る水のおかげです。この流れ出る山にもっと人工的に手を入れて山を若返らせなければ、当たり前に出ている水もいつかは……。

そういう意味で、山に目を向けてもらう一環として取り組んでいます。

薬木・薬草類で生業になりますか?

正直なところ薬草・薬木類では採算は取れていません。でも、本業と共有しながらなんとか継続しています。取り組む以上早く採算の取れる事業に育てなければならぬと思っています。

余談になりますが、「費用対効果」という言葉があります。

文字通り、投資(金・労力・時間等)に対する効果という意味ですが、山(自然)に対しては当てはまらない言葉だと私は思っています。効果の影響力のレベルが違いすぎるからです。

「費用対効果」も当然大切ですが、一番大切なのは、昔からの固定概念にとらわれず、その時代のニーズに合った取り組みを絶えず考え、実行することだと思います。

そしてそれに取り組む勇気と行動力こそが林業業界には今最も必要だと思っています。

今後期待すること

今回の取材を通して、尾田氏の過去の固定概念にとらわれず、常に新しいことを考え、実行する強い気持が感じられました。

(株)白峰産業は、造林業が本業であることから、急傾斜地が多い白山麓における利用間伐等にも、色々なアイディアを生かして取り組んでおられます。

持ち前の積極性と行動力、斬新なアイディアを生かした、今後の更なる活躍に期待しています。(石川農林総合事務所森林部)

この人に聞く

能登の里山で製炭業に生きる

大野長一郎さん



づけています！

このような中、ブランド化を目指した道筋を模索しているとき、単価の高いお茶炭のことを知りました。

平成16年からお茶炭に最も適した樹種であるクヌギの苗を取り寄せ、遊休農地に植え始めました。

植栽から8年後の平成24年には始めてクヌギを使ったお茶炭を焼きました。

お茶炭の生産量はどのぐらいですか。また単価は。

平成27年度の実績は、クヌギが1.6tと茶道練習用のコナラが0.4tの計2tです。私が焼く炭の約1割に当たります。

単価は、一般の燃料用がキロ当たり約300円ですが、お茶炭は茶道練習用のコナラが約700円、クヌギの一番良いものは3,000円程度で平均で1,000円ぐらいです。

良いお茶炭とはどのようなものですか。

原材料にはクヌギ、コナラ、カシなどが使われますが、火力が強く、見た目がきれいな最上級品はクヌギが適しています。

断面が真円に近く、樹皮が密着し、皮が薄すぎず、厚すぎず、



初回伐採から4年が経過したクヌギの萌芽林

放射状のヒビと年輪が円の中心から均等に広がり菊の花のように見えるものが良いとされています。このためお茶炭は菊炭とも呼ばれています。

樹皮が剥がれては品質が低下し、販売価格が落ちるため、原木となる立木の伐採適期は晩秋に限定されます。

焼き上がった炭を適当な大きさに切って商品にしますが、お茶炭は長さ、太さの規格が細かく決められており、見た目も重要な要素であり、細心の注意が必要であります。

クヌギ原木はどのように調達していますか。

すべて自家生産です。現在、約6,000本のクヌギ林を管理していますが、今後、さらに2,000本の拡大を考えています。

管理しているクヌギ林の生育状況

況はいかがですか。

今のところ順調に育っています。最初に収穫したクヌギ林が萌芽更新し、4力年が経過しているため、あと3年から4年を経ると2回目の収穫ができる予定です。

能登地域におけるお茶炭のブランド化は可能だと思いますか。

ブランド化はすでに取り組んでいます。私の焼く炭は「柞」（ははそ）と言つブランドで箱詰めされています。「柞」とはナラ・クヌギ類の総称を意味する古い言葉で、本県ではコナラを指す「ほうそ」と同源です。

お茶炭は、大産地であった福島県産が原発事故のため生産できなくなり、また、栃木等の他産地も生産者の高齢化等で全国的に不足している状況であります。

能登地域全体で総力を挙げて取り組めばブランド化は十分可能と考えます。

今後の目標は

年産10tのお茶炭生産を目指しています。このためには原料のクヌギ原木を自家生産のみで賄うには無理があり、供給体制の整備が不可欠と考えています。能登の里山活性化の一策として、県産お茶炭生産に対する行政の積極的な支援に期待しています。

(奥能登農林総合事務所森林部)



お茶炭

珠洲市東山中町で製炭を専門に営む大野長一郎さんにお話を聞きました。

茶道用の炭を焼いているとお聞きしましたが、きっかけは何でしょうか。

平成11年から父に付いて燃料用のナラ炭を焼き始めましたが、安い外国産の輸入品で市場価格が下がり、経営が厳しくなるとともに、県内の生産者も徐々に減少しました。現在も減りつ

この人に聞く

東山町たけのこの里を守る

J A小松市たけのこ部会 副部長 吉田 達(とおる) さん

○はじめに



かつて、竹林はタケノコや竹材加工品の資材等の生産のため、県内各地で整備・管理されてきました。近年、安価なタケノコや竹材の代替品の増加に伴い、管理されなくなった竹林が増加し、周辺の森林に侵入・繁茂しており、森林の公益的機能の低下をもたらしています。

このようなか、小松市東山町は、竹林が適正に管理され、タケノコの名産地として知られ、毎年、初出荷日が金沢よりも4〜5日程度早いため、テレビや新聞等で取り上げられています。そこで今回は、J A小松市たけのこ部会副部長である吉田達さんに、東山町のタケノコ生産のための竹林管理について、お話を伺いました。

○東山町のタケノコ

「東山町史」によると、タケノコの歴史は170年ほど前の江戸時代に遡り、商品としての栽培は大正時代からで、およそ100年の歴史があります。吉田さんが管理している竹林

の一带は、60年ほど前に、国の補助事業により、雑木林を開墾し造成した竹林だそうです。東山町の竹林は、粘土質の赤土で、タケノコ生産に適しており、土から顔を出す前に収穫するため、色が白く柔らかく、甘みがあり香りも豊かで美味しいと評判で、現在では金沢市から



百年の歴史を刻む東山町タケノコの里

買い求めにいられる方もいるとのことでした。

○竹林の管理

タケノコ生産のための竹林の管理作業として、ウラ止め、親竹の本数管理・更新、施肥、除草、天地返しなどがあります。

※タケノコが成長して竹になる途中で、先端部分を揺すって折り、成竹の高さを制限する作業
吉田さんにお聞きすると、

・竹林のウラ止めは、雪害や暴風対策になり、また地面に日が当たらないことから重要な作業で、親竹の本数管理は、竹と竹の間隔を2〜3m取るようにしている。
・親竹は、7〜8年でタケノコ

が出なくなるので、根が腐りやすい梅雨時期に間引きしている。
・除草作業は年3回、草刈り機のナイロンカッターではなく、刈刃で深めに刈り込むようにしている。
・施肥は年2回行い、鶏糞などによる有機栽培に取り組んでいる。

・近年は、イノシシが2〜3月頃に土の中のタケノコを食害するため、大きめのポリ袋をぶら下げるなどの対策をしている。
・東山町では根が張りすぎた竹林を約20年毎に、3mの深さまで掘り返す「天地返し」を実施するが、小松市はこの経費に補助してくれているので、大いに助かっている。

とのことでした。



ウラ止めされた竹林

多い年は、特に美味しいものが採れるそうです。

○東山町のタケノコ生産の今後



「天地返し」の竹林

現在、生産農家は25軒ほどいるものの、平均年齢は66歳と高く、今後、生産者が減少していくことが見込まれることから、生産者・生産量の確保が重要な課題といえます。

このため東山町では、生産性の悪いところの生産を止め、生産性の良いところだけに絞り、共同で生産するなどといった対応策を検討しているとのことでした。

○最後に

美味しく品質の良いタケノコを生産に取り組む姿勢や、東山町のタケノコの産地を維持するために、また、タケノコの里の存続のためにどう取り組めば良いか思案するその姿勢に熱い思いを感じ取ることができました。今後のますますのご活躍を期待しています。

(南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

宝達葛の伝承

宝達葛生産友の会代表 佐藤 勝治さん



宝達

宝達地区では、県下で唯一昔ながらの手仕事で行われている葛生産がこれから厳冬期にかけて始まります。今回は宝達葛生産友の会代表の佐藤勝治さんにお話を伺いました。

宝達地区は宝達山が加賀藩の金鉱山だった400年以上前に多くの鉱夫たちが全国から集まってきて大変栄えていました。過酷な採掘作業を続ける鉱夫たちの健康管理に役立てるため、

○時代背景

山に自生していたクズの根を掘り、漢方薬として使っていたのが宝達葛の起源と言われています。大正時代



宝達山中腹で採掘(一株130kg)

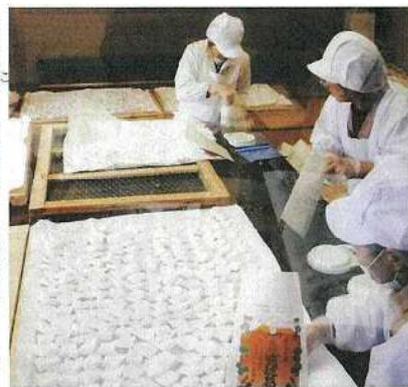
山に自生していたクズの根を掘り、漢方薬として使っていたのが宝達葛の起源と

には本格的な生産が始まり約70戸が葛づくりに関わっていましたが、近年安い製品が出てきたことにより徐々に衰退していき、現在友の会員4名で生産を続けています。

○伝統的な製造方法

葛はクズの根から取れる澱粉からできています。クズの根は大きいもので130kgもあり、山から運び出すのは大変な作業です。今でも少しは宝達山系の

自生クズを採っていますが、ほとんどが九州の業者から取り寄せた材量で生産しています。原材料のクズからとれる葛の量は大体8%程度しかありません。それ以下になると生産性が悪く赤字になってしまいます。製法は、まずクズの根を細かく砕いて水を含ませながら足で汁を絞ります。この作業を3回行い、



布で濾してから1晩置いて上に溜まった灰汁を捨て布袋で濾します。そこに水を入れてかき混ぜて、1晩置いて上に溜まった水を捨て布袋で濾します。この作業を3回以上行って、最後に桶の下に溜まったものを豆腐のように切り分けて取り出し、ざるに移して2週間くらい乾燥させて、やっと製品になります。製造期間は1月から4月までの4カ月間で、生産量は年間約350kgです。出荷先は主に町内

です。出荷先は主に町内です。昔はこの辺り一帯で葛づくりは行われていましたが、時代とともに無くなっていき、今ではほとんどありません。機械化す

○今後は

願っています。(中能登農林総合事務所森林部)

れば多く取れることはわかっているのですが、手仕事で作ったものは機械で作ったものでは出れない品質があると思います。ですから継続的に注文をくださるお菓子屋さんもあります。私たちは昔ながらの製法を伝えることにより、この地区の歴史と文化を継承してゆきたいと思っています。

○最後に

取材の際に佐藤さんが一杯の葛湯をご馳走してくれました。葛をお湯で溶いたものに、少しだけ砂糖を混ぜたものです。昔懐かしい味がして、何とも言えないやさしい舌触りがありました。なんだか少し元気をもらったような気がして、今後も頑張つて生産を続けていただきたく願っています。



この人に聞く

祖父母の出造り時代から受け継ぐわさび生産

わさび生産者 白山麓わさび振興会 役員 橋本 和則さん



白山麓には、トチノキ・ブナ等の広葉樹林が多く、きれいな湧水を利用した、わさびが生産されています。白山麓で生産されるわさびは「白山わさび」と称されています。

学校を卒業してからは、建築・土木業をしていましたが、昭和55年頃からわさびの生産を考えはじめ、静岡県へ勉強に行き、本格的にわさび生産を開始したのは平成元年からで、生産を開始してから今年で30年ほど経ちました。

○生産されているわさびの規模・品種・栽培方法について教えてください。

わさび田は10アールあります。賀茂自交が9割、白山わさび(在来種)が1割です。年間生産量は、根茎100kg、葉柄100kg計200kgです。

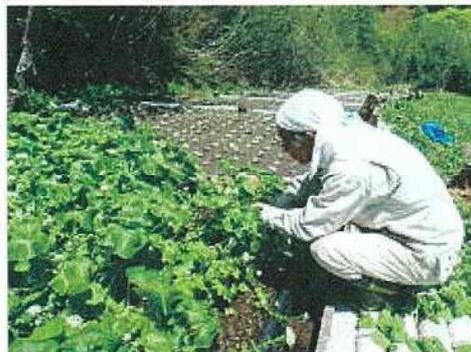
「白山わさび」は、白山麓の出造り農家が自生していたわさびを谷にまとめて栽培したのが始まりです。栽培の歴史は古く、慶長年間(約400年前)に、加賀藩主が徳川家へ献上したと言いつづけています。(出典：平成30年度地域食材利用促進事業調査)

今回は、白山市下田原地内でわさびを生産されている橋本和則さんに、お話を伺いました。

○わさびはいつから生産されていますか。

祖父母が出造りで生産していたわさび田に、中学校の頃から親と手伝いに来ていたのが始まりです。

に出荷していきます。



わさび田での作業状況

○生産したわさびは、どのように販売していますか。

主に、白山市内・能美市内のJAの直売所3箇所販売しています。春期は、葉柄を束にして販売しています。わさびの花が咲き終わる5月下旬から、根茎の出荷を始めます。根茎のうち大きく育ったものは、金沢中央卸売市場へ直接持ち込んで販売しています。

夏期になると葉は大きく硬くなるので廃棄するしかありませんでしたが、現在は白山わさび

の加工品を作っている(有)松風産業へ販売しており、収入の一部となっています。

○病害虫・獣被害の状況とその対策を教えてください。

葉に青虫が付くので、手で1匹ずつ取り除いています。また、イノシシがわさび田にいるミミズを食べるために田を荒らすので、周辺をブルーシートで覆って対策しています。



葉柄(賀茂自交)

根茎(賀茂自交)

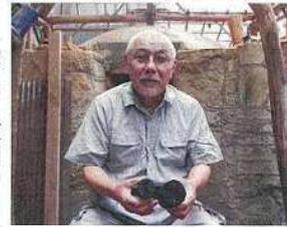
○最後に

祖父母から引き継いだわさび田で数々の試行錯誤を重ね、厳しい自然と向き合いながら、品質の確かなわさび生産に努めておられる橋本さんのもとには、お子さんとお孫さんが遊びがてら手伝いに来るそうです。

(石川農林総合事務所森林部)

この人に聞く

石川をお茶炭の産地に



木炭の生産は、生活様式の変化による炭需要の縮小に加え、外国産の安価な炭が流通する

など、全国的に大変厳しい状況にあります。県内では茶道に使用される「お茶炭」を生産することで収益の向上につなげる取り組みが行われています。今回は、能美市でお茶炭を生産されている安田宏三さんにお話を伺いました。

○炭焼きを始めたきっかけは？
旧国鉄の職員でしたが民営化の少し前に退職し、誘われて地元旅館の副支配人になりました。営業を任せられ中京、関西を飛び回る激務でしたが、山に行けばストレスが消えていき、「自分は里山で生きているのが向いているのかな」と感じていました。ある日、食事に入った炉端焼き店の炭のにおいに子供の頃の囲炉裏や火鉢の記憶が呼び起こされ炭焼きなら里山で食べていけるのではと思い、46歳から炭焼き

を始めました。

○お茶炭との出会い

平成2年に能美市鍋谷町で炭焼きを始めると、メディアから沢山の取材を受けました。それを見た人から「茶道をしている娘がお茶炭を欲しがっているの焼いてくれないか」と言われ、研究を始めました。

お茶炭の産地は岩手県、栃木県、兵庫県、愛媛県などがあるのですが、年々生産者が減少し無くなった産地もあると聞きます。私が本格的にお茶炭を焼き始めたのは15年ほど前です。



木口が菊の花のように美しく焼き上がったお茶炭

○生産で苦労したことは？
お茶炭は皮がきれいに付いていなければなりません。これがなかなか難しい。生産地へ視



炭窯内部

察にも行きましたが、職人が苦勞して得た技術はなかなか教えるではもらえません。

木を伐る時期を変えたり材を逆さまに立てたり色々試しましたが、これだというところにはたどり着きません。たまにうまくいっても歩留まりが悪かったです。研究を重ねるうち、乾燥焚きの工程を長くして材の水分をゆっくり抜くことで皮付きの良い炭が焼けることがわかりました。焚き口の塞ぎ方や煙突を開けるタイミングなどを工夫して、時間は通常の倍近くかかりますが歩留まりは8割を達成しました。

現在県内で4人程がお茶炭を焼いています。珠洲市の大野さん以外は高齢で、産地化のためにはせめてもう一人若手がやってくれたらと思います。
また、県内には原料となるクヌギ林がほとんど無く、安定生産のためには植林して適寸で伐ってまわしていくことが必要です。萌芽更新では8年ほどで適寸になるので、それほど長い話でもありません。
茶道が盛んな金沢に加え全国から注文があります。今は生産量が少なく宣伝できない状況です。通常の炭が300円/kgなのに、お茶炭は1、500円/kg程で売れるので、本気になれば事業としてやっています。
○30年を経て思うこと
炭焼きは自然のサイクルに身を置き、自然の力を借りてやる仕事。そこに自分で工夫して思ったとおりの炭が焼けた時の達成感は格別です。もし誰がこの技術を受け継いでくれる人がいたら惜しみなく教えたいと思っています。

(南加賀農林総合事務所森林部)

能美市 安田 宏三さん

この人に聞く

白峰の伝統を守る菓子作り

有限会社志んさ代表取締役 織田 毅さん



トチノキ (Aesculus turbinata) は、トチノキ科の落葉性の高木で、適度に湿気のある肥沃な土壌で育つとされ、県内では白山麓に多く分布しています。

その実は、古代から食されてきていますが、サポニンやタンニンの渋み・苦み成分があるためにアク抜きが必要な食材です。今回は、その栃の実を使った白峰の特産品であるとち餅を製造している(有)志んさの織田毅さんに、祖父が建築した店舗兼製造所できるとち餅にかかるお話を伺いました。

その当時のとち餅は、あまりおいしいものではなかったようにも。その後、昭和36年に現在の店舗ができ、和菓子を学んでいた父親が現在の原型となるとち餅を商品化しました。

○栃の実はどの様に集めているのですか。



主に自分で、白峰周辺で収穫しますが、地域の方が収穫し持ってきてくれます。

○白峰のとち餅はいつからあるのですか。

詳細は解りませんが、昔から白峰にはヒエやアワと一緒に栃の実を煮て、栃粥として食す文化が有り、盆、正月などには貴重な餅米と併せて栃の実が主体のとち餅を食べていたみたいです。

トチノキ材の価格が上がり、伐採されるが多くなってきた。栃の実を拾いに行くと、ぼつかりと抜けていることもあり、栃の実を集めるのも大変になってきています。

○とち餅の製造工程を教えてください。



まず、栃の実を天日で50日程度乾燥させ、2〜3年貯蔵します。新しい栃の実は、きれいな色が出てく、皮も剥きにくいので使用しません。

1 晩付け、その後金槌で叩いて実を取り出し、10日程度水にさらし、灰汁で煮て保温しながら2晩ほど放置します。

その後水洗いして、餅米と一緒に蒸して餅をつきますので、製造に2週間程度かかります。

○栃の実の活用はとち餅だけで

すか。私は、大阪の洋菓子屋に修行に出ていたもので、焼くと香ばしさが立つ栃の実を洋菓子に活用しました。具体的には、シュークリームとパウンドケーキですが、他に栃蜜を使ったカステラも製造しています。

○最後に、今後の抱負を教えてください。

現在商品化されているクロモジを使ったロールケーキのような、山の幸を使った新しいことにもチャレンジしたいと考えています。

同時に、近年、観光地化されると昔からの手間のかかるお菓子が無いがしろにされているのを目の当たりにしているので、本物のとち餅を残していきたいと考えています。

取材中もひっきりなしにお客さんが来店するなか、丁寧に対応していただきました。白峰に行かれた際には是非お立ち寄りください。

(石川農林総合事務所森林部)

この人に聞く

オール輪島の輪島塗を目指するし掻き職人

輪島市二俣町

ながひら いさむ
長平 勇さん



長平勇さん

国内で使用される漆のうち国内産はわずか約3%で、輪島塗でも中国産の漆が多く使用されています。

輪島漆器商工業協同組合とともに輪島産の漆と木地を使ったオール輪島の輪島塗を目指す、うるし掻き職人の長平勇さんにお話を伺いました。

○始めのたきつけと技術習得方法
平成25年、当漆器組合がうるしを掻く人を募集していることを知り、応募したことがきっかけだ。

幼少のころ、近所に掻き手はいたと思うが、今では身近で経験がある人はおらず、故・古地喜太郎さん（輪島市縄又町）の下で1年間技術を学んだ。その後、国内最大の産地である岩手県二戸市浄法寺で行われた半年

間の研修へ行き、道具の作り方や手入れの方法などを一から教わった。

○うるし掻きの手順と道具

ウルシの木の幹にはごつごつした樹皮があり、まず専用の「カマ」で削らなければならぬ。太い木は樹皮も厚く硬いため、これが大変な作業だ。

6月に入ると「カンナ」を使いウルシの幹に「辺」と呼ばれる傷をつける作業が始まる。カンナは、U字形に曲がった刃と先が鋭く上がった「メサシ」と呼ばれる刃がついていて、U字の刃で樹皮に溝を掘り、メサシで辺材部まで傷をつける。この傷から分泌するうるしを専用の「ヘラ」で掻きとっていく。



ウルシの樹皮を専用のカマで削り、辺をつけたりうるしを掻きやすくする

おおよそ4日おきに1本ずつ辺をつけていく。辺は上に行くほど長くなり、晩秋には1か所あたり20辺ほどになる。

○採取時期とウルシの木の管理

6月から7月中旬までにつける5辺程度を「初辺」と言い、練乳のような粘度が高いうるし（初漆）と言つゝが採れる。その後、8月下旬までのものは「盛漆」と呼び、初漆と比べ量が多くさらさらとしている。

一般的には、11月までうるしを採り伐倒する「殺し掻き」が行われ、植栽のほか、切り株や根からの萌芽枝により更新させる。一方、輪島では伝統的に、



ウルシに辺をつけるカンナ

9月以降はうるしを採取せずに、数年後に再び採取する「養生掻き」が行われてきたようだ。

○これから

昨年うるしを掻いた木は約40本、今年採取する木はまだ数本しか決まっていない。

輪島市が行った調査では、過去に植栽したウルシが町野から門前にかけて点在して残っているが、まとまって生育している場所はあまりない。木がないことにはどうしたものか・・・。ただ、続けていかなければだめだ。輪島産の漆を求める塗師がいるからには、唯一の職人として頑張りたい。

△編集後期▽

取材に伺った6月上旬、昨年、長平さんが輪島市三井町でうるしを掻いた幹回り約2m、樹高約30mの巨木からは新たな葉が芽吹いていました。何年か後にまた、この木からうるしが採れるまで、能登に残るウルシを探し求める日々が続きます。長平さんの今後ますますのご活躍を期待します。
(県奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

ウルシの実を活用した和ろうそく作り



七尾における和ろうそく作りの歴史は、1650年頃に、七尾を領地とした前田家がろうそく作りを推奨したのがはじまりとされています。

七尾における和ろうそく作りの歴史は、1650年頃に、七尾を領地とした前田家がろうそく作りを推奨したのがはじまりとされています。

七尾は江戸から明治にかけ北前船の寄港地として栄えたため、各地の原料を取り寄せ、出来上がったろうそくを各地に運ぶことができたことから、ろうそくの生産が盛んになりました。

今回は、明治25年創業という120年以上の歴史を持ち、ウルシの実を活用した和ろうそく作りにより「いしかわエコデザイン賞2019」の金賞を受賞され、県内で唯一和ろうそく作りをされている「高澤ろうそく店」代表取締役 高澤 久さん（七尾市）に、これまでの取組みや今後の抱負についてお話を伺いました。

○ウルシの実を活用したろうそくづくりを始めたいきっかけと苦

労した点

輪島市でウルシの植栽活動に取り組む方から、ウルシの実を活用してろうそくを作ることができないかと打診を受けたのがきっかけです。

漆器の産地、輪島市では国産漆の自給のためにウルシの植林活動を行っているとの事ですが、塗り物用に漆を掻けるまでには約20年程度かかるうえ、下草刈りなど育てるのに手間がかかるなど聞いたことから、私たちがウルシの実を購入し、ろうそくを作ることで継続的にウルシの木を増やす活動を後押しできないかと考え、それまでウルシの実を原料とするろうそくづくりのノウハウはありませんでした。

まずは、実を蒸した後にしぼってロウをとることから始めました。ロウからろうそくを作るにあたっては、漆特有の融点を把握することに加えて、芯とろう



ウルシの実

芯とろう

「高澤ろうそく店」代表取締役 高澤 久さん

その兼ね合いを見極めるためにも試行錯誤の時間を要し、商品化までには約3年かかりました。

○「うるしろうそく」づくり

11〜12月に採取された実は翌年3月まで自然乾燥され、その後1ヶ月ほどはロウ作りに時間を要し、5月頃からろうそくを作りはじめ、毎年6月頃に販売となります。

輪島市内で採取された実は全量購入しておりますが、まだウルシの木が生育途中であることから昨年300kgほどでした。採取できるロウはその1割ほどの約30kgとなり、生産したろうそくは約5千本ほどでした。おかげさまで、「うるしろうそく」は、毎年完売しており、今後も引き続き取り組んでいきたいと思っています。

○「うるしろうそく」の特徴

「うるしろうそく」の特徴としては、炎がオレンジ色で暖かみがあり、ゆったりとしたゆらめきで火持ちが良いという点が挙げられます。

慌ただしい毎日の中で、「うるしろうそく」に火を灯して、



「うるしろうそくの灯」(写真提供：高澤ろうそく店)

ゆったりと穏やかな時間を暮らしたい中作っていた

○今後の抱負

「うるしろうそく」づくりは、1つの大きな「輪」のようなものではないかと考えています。その輪は、ウルシの木を育む能登の里山、ウルシの木をお世話し実を採る人、私たちろうそくを作る者、そしてそのろうそくに火を灯して下さる方によって成り立ち、この輪によりウルシの植林・保全活動が進み、能登の里山風景や能登の塗文化を次の世代に引き継いでいく、お手伝いできればと思っています。

＜編集後記＞

「高澤ろうそく店」では、ウルシの実以外にも菜種、ハゼなどの天然素材を使って作られた様々な和ろうそくを販売しています。まだ行かれたことの無い方は、ぜひとも足を運ばれてはいかがでしょうかと思います。

(県中能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

地域の里山を活かした取り組み

キノコ生産者 山本 謙一 さん

白山市河内町福岡に暮らす山本謙一さんは、地域の裏手に続く山林内で、原木シイタケやナメコなどを栽培しています。

また、ご自身の所有林に手作りの遊具を設置して、子ども達の体験学習の場として提供しています。

今回は、里山を活かした取り組みについて、山本さんにお話を伺いました。

○どのようなお仕事をなさっていますか。

仕事は農林業で、山菜やキノコを栽培して、農協の直売所などに出荷しています。

昔は、福岡地区の緩傾斜の山を利用した山地放牧が出来ないかと考え、高校卒業後に島根県の牧場で研修を受け、牛飼いを始めました。しかし、この地域は雪が多く畜舎を建てられないなど、冬場の管理が困難であったことから4年で断念しました。

その後、農業は冬仕事がありません。その後、建屋内で生産できる工ノキ栽培にも挑戦しました。

当時は、県内で20数名の生産者があり、一緒に頑張ってきましたが、朝から晩まで働きずくめの毎日です。

3人の子も達が成長したこともあり、今は、山を活かしながら楽しんでやっていきたいと考え、原木栽培のシイタケ・ナメコ・マイタケ・クリタケなどを生産しています。

○**特用林産物の生産について工夫されている点はありますか。**

県外で林業や山小屋管理の仕事をしている息子が、帰省したときには手伝ってくれますが、普段は一人で伐採・玉切り・植菌などの作業を行っています。地域の山を2haほど管理しており、原木は所有者の方から立木を買い取って調達しています。

昔から、炭焼きや原木調達のため20数年周期で伐採してきた山で、自分が利用することで、この里山を次

れは大変でした。



山本謙一さん

の世代に引き継げればと考えています。

キノコ販売のほか、マイタケの培地も販売しており、自分の山で栽培したいので売って欲しいという方に販売しています。

また、地元で観光ボランティアを行っている団体「加賀白山ようござった」と協力して、所有林を子ども達の体験学習の場として提供しているのですが、本年度から試験的にシイタケ原木のオーナー制度を始めました。

これは、オーナーが植菌を行った原木を私が管理して、芽だしの時期になったらオーナーにお返し収穫してもらおうものです。

○**所有林を児童の体験学習の場として、提供できるようになったきっかけは何ですか。**

50数年間にわたり山で仕事をしていると、人に見せたいと感じる里山の風景に多く出会います。木々の芽



原木しいたけの収穫体験



所有林に整備した遊具で遊ぶ子ども達

吹きや可憐な山野草、地面に降り積もった落ち葉、キノコが一斉に見える姿など、ぜひ多くの方々に見てもらえたらと考えて学習の場を提供し始めました。

今では、県・白山市・地元の公民館・こども園なども協力し、多くの方が毎年訪れてくれるようになりました。

所有林に整備したツリーハウス、遊歩道、遊具施設などで、子ども達に遊んでもらっているほか、一般の方を対象にした、春はカタクリ観察会や山菜を利用した里山キッチン、秋はキノコ探しのレッキングなども企画しています。

これら詳細は、「加賀白山ようござった」のホームページに掲載していますので、多数のご参加をお待ちしています。



ようござったQRコード

(県石川農林総合事務所森林部)

この人に聞く

菌床しいたけ栽培で「加賀の星」を目指す

社会福祉法人佛子園 ワークセンター星が岡
サービス管理責任者 宮岸 正明 さん

能美市和気町の丘陵地に位置する障害者支援施設「星が岡牧場」。その施設内には、通所や入所の方が働く、「ワークセンター星が岡」があります。

「このサービスの管理責任者である宮岸正明さんに、お話しを伺いました。」



宮岸 正明さん
(菌床しいたけのビニールハウスの前で)

○ワークセンター星が岡の概要を教えてください。

元々、星が岡牧場では利用者の作業として、施設内でそば等を育てる農耕作業を行っていました。しかし、せっかくならば、賃金を払う

仕組みが欲しいと考え、就労サービスをを行う「ワークセンター星が岡」を始めました。

ここでは、主に配食サービスを行う「グリーン星が岡」と、野菜等の栽培を行う「アグリ事業」の2部門に分かれており、現在、就労継続支援A型・B型合わせて20名が働いています。

ここで働くことで、自分の役割のある居場所を見つげることができ、ほか、働くことの喜びや、賃金をもらうことについても学ぶことができます。

○菌床しいたけを栽培することになったきっかけを教えてください。

農耕作業を行っていた施設内の土地の土壌改良を行うため、石川県椎茸菌床センターに廃菌床をもらいに行った際、しいたけの栽培を勧められ50個ほどの菌床をもらったことがきっかけです。

ノウハウが何もない状態でしたが、せっかくなので、月に1回同菌床センターのセンター長の巡回指導を受けながら、元々小松菜を水耕栽培していたビニールハウスを

利用して、試験的に栽培を始めた。

その後、県内での菌床しいたけ生産者の減少を受け、社会貢献や事業承継に繋がればという思いで、本格的に栽培を行うようになり、現在では1万2千個の菌床でしいたけを栽培しています。



菌床しいたけ栽培の様子

菌床しいたけの栽培は、ある程度決まった作業が多いため、障害のある利用者でも参加しやすく、栽培・収穫・包装・出荷等すべての作業に利用者が関わっています。

○「いしかわ里山振興ファンド」での取り組みについて教えてください。

現在、能美市の名産である国造ゆずと規格外の菌床しいたけを使用したポタージュスープやパスタソースの開発を行っています。2回試作を行いました。香りが高いゆずの風味の活かし方や、しいたけの食感の残し方等、商品化に苦戦しています。

また、栽培した菌床しいたけのブランド強化にも取り組みました。施設名の「星が岡」と、加賀で

「星のように輝く」といった意味を込めて「加賀の星」と名付けました。「加賀の星」は鮮度が最大の売りで、ワークセンター星が岡のほか、道の駅こまつ木場潟、JAあぐり、JAグリーン能美で直売しています。

今年も、能美市のふるさと納税の返礼品としても選ばれ、既に発送を始めています。「加賀の星」のおすすめの食べ方は、オーフントースターを使ったり、アルミホイルでの蒸し焼きです。食感と豊かな香りを堪能する事ができます。



能美市のふるさと納税返礼品にも選ばれた菌床しいたけ「加賀の星」

○今後の展望等あれば教えてください。

菌床しいたけの生産は、施設利用者の仕事や賃金源に十分なり得ます。そのため、新たな栽培施設の設置による事業拡大も検討しています。引き続き、当ワークセンターでは菌床しいたけ栽培や配食サービス等を通じて、施設利用者の就労継続を支援し、地域を盛り上げていきたいと考えています。
(県南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

地域の恵みを詰めたクラフトジン

つるぎ蒸溜所 代表 羽場 和宏 さん

白山市下東町（鶴来地区）に令和3年、「つるぎ蒸溜所」が設立されました。つるぎ蒸溜所では、県内産の原料を用いたクラフトジンを製造しています。代表である羽場和宏さんにお話を伺いました。



羽場 和宏さん

○鶴来地区に蒸溜所を構えることになった経緯を教えてください。

私は金沢市木倉町で飲食店を営んでおり、石川県内で地域の素材を用いたお酒があまりなかったことから、地域の恵みを生かしたお酒がでないかと以前から考えていました。

蒸溜所を構えるにあたり、蒸留酒造りでも重要な水を求めて、白山水系で場所を探していたところ、鶴来地区でご縁があり、この地に蒸溜所を構える運びとなりました。鶴来地区は手取川扇状地の上端に位置し、「菊水」と呼ばれる口当たりの柔らかな白山の伏流水が豊富にあります。この伏流水を使い、味と香りにこだわった「HAKUSAN Craft Gin」を造り上げることが出来ました。



つるぎ蒸溜所の蒸溜施設

○「HAKUSAN Craft Gin」について教えてください。

「ジン」とは、ジュニパーベリーという西洋ネズの実を香り付けに使った蒸留酒のことです。「クラフトジン」とは、明確な定義はないのですが、「職人の技術や想い、地域や土地の素材を使ったジン」と言われています。

「HAKUSAN Craft Gin」こだわりのボタニカル（植物性の素材）は、マケドニア産のジュニパーベリーを主とし、金沢市産のユズ、津幡町産のラベンダー、鶴来地区産の和ハッカ、加賀棒ほうじ茶、七尾市内の皆伐地で未利用資源となっていたモミの葉になります。



HAKUSAN Craft Gin
(背後の葉はモミ)

○「HAKUSAN Craft Gin」は、令和6年度石川県優良観光土産品推奨審査会にて石川県観光連盟会長賞を受賞し、ご好評いただいています。召し上がる際は、素材本来の香りや風味を感じていただきたいので、ロックや炭酸水割りがおすすめです。

これらの商品を通じて、石川県や森林の恵みの魅力を伝えていきたいです。県内のネズミサシの生育情報や香りがよい森林資源がありましたら、情報提供をいただきたく思います。（石川県石川農林総合事務所森林部）



クラフトジンに使用するボタニカル
(中央がジュニパーベリー)

です。県内では24箇所、県外では2箇所の酒店で取り扱っています。

○今後の展望について教えてください。

まずは、ジュニパーベリー（西洋ネズ）の代わりに日本のネズミサシが使用できないか興味があります。また、モミの葉のような森林の未利用資源から新たなボタニカルも見つけてみたいです。

「HAKUSAN Craft Gin」は、県内で消費することを想定して制作しましたが、さらに県外に向け、視野を広げたアロマスピリッツの製造を検討しています。

これらの商品を通じて、石川県や森林の恵みの魅力を伝えていきたいです。県内のネズミサシの生育情報や香りがよい森林資源がありましたら、情報提供をいただきたく思います。（石川県石川農林総合事務所森林部）

この人に聞く

薪ストーブ、使ってみませんか？

株式会社通商燃料

あにじ
兄後智明・石谷光男



左：兄後さん、右：石谷さん

能登町字天坂にある株式会社通商燃料は、4年ほど前から薪やペレットを取り扱っています。代表の兄後智明さんは能登町天坂でガソリンスタンドを経営しており、木質系燃料の取り扱いを思いついた経緯や今後の展望についてお話を伺いました。

薪生産・販売を始めたきっかけは2008年に原油の価格高騰が起これば灯油価格も上がりまじが、石油は便利なエネルギーですが、価格の激しい変動を販売店ではどうすることもできないのが現状です。そこで石油系以外のエネルギーをガソリンスタンドで取り扱いできればと思ったのが始まりです。

薪の材料となる原木は能登町や輪島市を中心とする奥能登地域から椎茸原木に出来なかつた大径木を主に買い集めています。

長さ2mくらいの材を専属の従業員が薪に加工し、夏場の乾燥から束にまとめるまでの作業を行っています。樹種は主にコナラで、ミスナラ・ケヤキ・サクラ等も少し扱っています。規格は30×45cmの4種類で年間約200トン販売しております。都会のお客様が多く、12.5×30kgの単位で段ボール詰めして宅配しています。都会では薪ストーブをインテリアの一部として意識しているためか、少し値段が高くても綺麗で見栄えのする薪を求められます。一方、地元で定期的に購入されるお客様は見た目より価格を優先する傾向があります。薪はストーブ用以外に、東海地方のピザ屋にも販売しており、年間を通して安定的に購入していただいております。

これからの展望
農産物と異なり薪には付加価値は付けにくいですが、販売を通して都会と田舎では「価値観」に大きな差があると感じています。田舎では価値がないと思っても、都会では高く評価し見合う対価を払ってくれるところがある。そこをよく理解して営業していく必要があると

薪用原木

思ったいます。また、薪やペレットといった木質系エネルギーは既に価格の相場があるため、大口で安定した消費先があつてこそ取り組める分野です。地域での普及・定着に向けて公的機関が積極的にボイラーやストーブの導入を検討してほしいですし、奥能登地域でエネルギー問題を考えた場合、4市町がバラバラで取り組んでも意味がありません。ぜひとも広域的な取り組みを期待したいです。

株式会社通商燃料はインターネットでも販売を行っています（ネットショップ「天坂屋」<http://tenzakaya.co.jp/>）。木質系エネルギーに関して鋭い切り口でお話いただいた兄後さんと従業員の石谷光男さん、お二人の今後の活躍を期待しております。

（奥能登農林総合事務所森林部）



薪用原木

この人に聞く

「田鶴浜建具」の伝統継承とこれから

七尾市田鶴浜町 岡野 繁(63歳)さん



「田鶴浜建具」の歴史は、1650年に長連龍の菩提寺である東嶺寺(七尾市)を建築するために尾張から2人の指物師が招かれ、その精巧な製作技術が現在の田鶴浜地区に伝承されたとされています。

○建具に使用する木材について、どのような木材が使われていますか。またどのような材が良い材料ですか？

使っている木材は、スギ、ヒノキ、米ヒバ等を主に使っています。スギは良質の秋田スギが一番なのですが現在は資源保護の面から伐採が控えられており、なかなか手に入りません。ヒノキは色が白いのが特徴、米ヒバも色は白いが年数がたつにつれ赤みを帯びてくるので、作る部材や模様に合わせて材を使い分けています。建具は細い材料を使うことが多いので年輪幅が狭いものが良質材として扱われています。特に組子細工は1cmくらいのいろいろな部材を組み合わせて作るもので、年輪幅が狭く強度が出るものが好まれます。またヒノキやアテは水に強い材なので、玄関戸や雨戸など水が

付きやすい建具によく使われます。

○現在の田鶴浜建具の状況は？

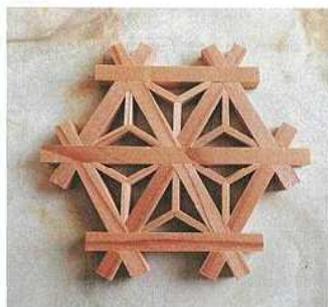
私が建具業界に入ったのは19歳の時で80軒くらいの建具屋さんがありましたが、現在は20軒くらいに減っています。最近では建具を使って建てる家が減ったのと、古い家で建具の修理が必要でも、高齢化等に伴い修理をしないという方も増えてきているので需要は減ってきています。20年くらい前に加賀屋さんの改修に多くの建具を使っていたので、その時は忙しかったですね。

○これからの展望について

次の世代へ技術の継承は大変重要なことだと思います。住宅の様式が変わりつつある中、これまで受け継がれた、高級な組子細工の作り方や基本的な建具の作り方を伝えていきたいです。そして最近はお客さんのニーズにあった建具の製作にも力を入れていきます。木を使った建具の素晴らしさを感じてもらいたく

○どのようなものを作っていますか？

家の建具全般を作っています。木を使った建具で、玄関の戸や襖・障子戸など建具に関するもの全般を作っています。田鶴浜建具は組子細工も有名で、組子を使った高級な襖や折戸なども



お土産品の組子細工(コースター)



組子を使った製作中の襖

て、行燈やおみやげ品のコースター・ミニ屏風なども作って販売・普及を進めています。これからも伝統の建具技術を生かし、未来の住宅やインテリアに「田鶴浜建具」が活用されるよう取り組んでいきたいと考えています。(中能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

木のぬくもりが伝わる手づくりの白山笠

石川県伝統工芸士（檜細工）

河岸すみゑさん



笠作りをしていたこともあり、主人と一緒に白山笠作りを始めました。

昔は年間に500個から600個程度作っていましたが、今は、歳をとったこともあり、年間200個程度しか作れなくなっています。

販売のピークは3月から6月で、県内のほか、富山県や福井県からもまとまった注文があるのですが、私一人では対応ができませんので、金沢刑務所で矯正教育の一環として、私が刑務所の方に作り方を教え、（刑務官が指導者となって）受刑者に作ってもらっているのを助かっています。

○白山笠はどのような工程で作るのですか。

白山笠はヒンナ（原材料板（檜）を薄く細い径木にしたもの）を作って、これを手で編んで笠を作ります。

昔は地元の山から檜を伐ってヒンナに加工し、使っていたの

ですが、今は地元の檜がないので、県外から製材等でいらなくなった檜の端材等をこちらから指定した大きさに加工してもらい調達しています。ヒンナは自宅で自動鉋（かん）を使って作ります。

白山笠の作り方を簡単に言うと、笠の頭の部分に当たる雨負（あまひ）い作りをした後、笠の部分をつくって、笠のへり（縁）をミシンで加工し、最後に雨負いさしをして完成させます。

○白山笠を作る上で大変な部分はどこですか。

笠を編むところはさほど大変ではないのですが、へり取りといわれる笠の縁の部分を編んでミシンをかけるのが大変な作業になります。縁の部分に竹が入っているので、普通のミシンでは針が竹に当たって折れるので、針の太い工業用のミシンで編んでいます。

○白山笠のよいところはなんですか？

畑仕事していても、蒸れず通気性が良くて涼しい。雨の日に笠をかぶっても、檜が雨を吸い込んで膨張し、笠の隙間をなくすことから、雨漏りがしないので雨笠にもなります。

○最後に

河岸さんの、「私が元気に家にいる間は白山笠を作っていました。いし、誰かが伝統を引き継いでいってくれたらよいが」と語っていたことが印象的でありました。

（石川農林総合事務所森林部）



白山笠

この人に聞く

木彫りでつくる加賀獅子頭

知土工房 知田 善博 さん

石川県の希少伝統的工芸品である木彫りによる加賀獅子頭の作り手は、県内にただ一軒、白山市の獅子吼高原の麓に店舗を構える知土工房を残すのみとなっています。今回は、知土工房の知田善博さんにお話しを伺いました。

○現在、どのようなものを制作していますか。

金沢市や小松市、加賀市内の町会から、新調や修理の依頼を受けた獅子頭を制作しています。赤い獅子頭は安宅町に納品する予定ですが、今年は新型コロナウイルスの影響でお祭りが中止になってしまいました。

獅子頭の制作には様々な職人さんが関わっています。漆は県内の仏壇屋さんに塗ってもらいます。目や歯は真鍮製で一つ一つが手作りです。昔は、かざり職人をお願いしていましたが、そのような職人もいなくなり、今は板金屋さんをお願いしています。



安宅町に納品される予定の獅子頭

○材料は何ですか。

材料は地元産の桐を使います。昔は下駄や箆筒にも使いましたが、今はほとんど使われないので、支障木など伐採された桐が出たときに購入



材料の桐は乾燥しすぎないように寒冷紗をかけて保管している

しています。桐は屋外で保管しますが、5〜6年経つと乾燥しきってしまい堅くて彫れなくなりです。獅子頭は、木口面を正面にして彫りこみます。獅子頭が大きいとより太い木材が必要となりますので福島県の会津や新潟県から取り寄せることもありますが、それでも出材は多くありません。



古くなった獅子頭（手前）と新調される獅子頭（奥）

○いつごろから獅子頭を制作していますか。

創業者は父の知田清雲で、加賀の伝統工芸である獅子頭の彫刻を学び、知土工房を立ち上げました。私は、高校卒業後、金沢の彫刻家、今英男氏の元で7年間修業し、その後、知土工房で獅子頭を制作しています。息子は、現在、大阪の仏師の元で仏像の彫刻を学んでおり、修業が終われば帰ってくる予定です。

○どこで購入できますか。

加賀獅子はお祭りの主役として活躍していますが、魔除け、厄除けの守り神として、床飾り、玄関飾りにも喜ばれています。現在でもお正月やお祭りの飾りは勿論、各種のお祝い（新築祝、結婚祝、出産祝、節句等）に用いられ、縁起の良い置物として、年間を通して親しまれています。

獅子頭の置物やアクセサリーは、知土工房のほか、白山比咩神社の駐車場に隣接する「くるゆりの里」でも販売しています。また、パーク獅子吼内の獅子ワールド館では、日本一の木彫り大獅子頭や世界各国の獅子舞、獅子頭が展示されています。是非、行ってみてください。

（原石川農林総合事務所森林部）



制作中の知田善博さん

この人に聞く

「木」の魅力で人と人を繋げる

榊シモアラ副社長 下荒 朋子 さん

加賀市柏野町に本社を構えるシモアラホールディングス株式会社は、製材・建設業を営む株式会社シモアラを傘下に抱えています。

2020年、小松市北浅井町に「そらのあそびば ハレノチクモリ（以下ハレクモ）」を造られました。この仕掛け人である副社長の下荒朋子さんに、お話を伺いました。



下荒朋子さん

○副社長はもと木材業界で働いていらしたのですか。
結婚するまでこの業界に携わったことはありませんでした。最初は右も左も分からず苦労しました。今では弊社の経理・労務の全般を担当しています。
○どのような経緯でこの施設を造られたかと思ったのですか。

共働きの家庭が増えて子供が家族といられる時間が少なくなっている。昨今、遊びを通じて子供達と向き合う時間になってほしいと思いました。この家族を繋げるツールとして「木（県産材）」をふんだんに用い、五感を使って遊べる空間を造りたいと考えました。

大人も童心に戻り、一緒にわくわくする気持ちを引き出してほしいと思います。たくさん親子がこの場所でお会いすることで、地域の輪が広がることを願っています。

○「ハレクモ」の予約状況はどうですか

おかげさまでご好評いただいています。今は新型コロナウイルス感染症防止の観点から利用人数の制限をしています。平日は未就学のお子さんを中心ですが、土日は小学生のお子さんも多くいらしゃいます。ハレクモは、それぞれが楽しみを見つけて遊ぶことができます。横を見ると穴がある、見上げれば階段がある。意識しなくても遊具や空間が

導きとなって発見や冒険、探求につながっていく。新しい遊びが自然と生まれる配置にこだわりました。ワークショップも定期的に実施しています。季節に応じた木工教室や、人形劇なども取り入れて、何度でも足を運びたいような工夫しています。

今後は、この空間を使って子育てを支援するような活動ができないかと模索しています。子育ての悩みを相談できたり、育児について学べるお手伝いができたらと考えています。



ワークショップ
木工



家族で遊ぶ

○施設を利用される親子の反応や感想をお聞かせ下さい。

施設全体が「いい香り」というお声をよくいただきます。また、利用される方には基本的に裸足で遊んでもらっていて、「床が気持ちいいね」と喜んでいただけます。手で触れて感じる木の温もり、好奇心を刺激する遊びのしかけに、さらさらした表情で遊ぶ親子を見て、嬉しくなります。これからも、この世界観に想像力を膨らませて楽しんでいただけたらと思います。



すべり台も楽しいよ！



絵本を読んでもらおう

○今後の展望をお聞かせ下さい。
暖かみのある木の手触りや香り、柔らかさ、叩いたときの音など、樹種によって木の特徴は違います。ハレクモを利用された方には、そういった木の個性をいっぱい楽しんでほしいです。

日本の風土に根付いた、このすばらしい木の文化を次世代につないでいきたい。ハレクモがその一助になればと思います。



ハレクモの塔と施設内観

そらのあそびば ハレノチクモリ

【電話】0761-23 3616

【URL】

<http://harenochikumori.com>

※利用予約が必要です

(県南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

能登ヒバの魅力で木材産業を活性化

鳳至木材株式会社 取締役 四住 一也 さん

輪島市中心部に近い山岸町にある鳳至木材株式会社は、昭和21年に創業した奥能登地域での大手製材業者です。今回は同社で能登ヒバの魅力を発信し続けている四住取締役にお話しをお伺いしました。



四住取締役
(鳳至木材玄関前)

○この業界に入られたきっかけは。

地元の高校を卒業後、東京の大学へスポーツ推薦で進学し、経営学部で学ぶ一方、関東で有力な野球部のピッチャーとして東都リーグで活躍するなど野球漬けの学生生活を送っていました。

大学卒業後は、2年間東京の製材会社で営業をしていましたが、親孝行がしたいとの思いから、古郷に帰り、父の跡を継ぐため鳳至木材に勤

めることにしました。

大学の野球部では、活躍できた一方で、練習でつらいことが多くあり、これは今の仕事で逆境を乗り越えていく原動力になっています。

○どんな仕事をされてきましたか。

鳳至木材に入ったとき、私は製材・配送を主に行っていました。会社はとても忙しく、仕事をこなさけない状況でした。朝注文を受けたあとすぐに、在庫を出したり製材したりして、当日10時頃までに注文の品物を揃え、工務店に配送するあわただしい毎日でした。今でも市場から自分が買い付けた丸太は、自分で製材することがあります。



製材工場内の様子

力を発信する活動をスタートし、石川の農林漁業まつりをはじめ東京ビックサイトなど様々な場所でエンドユーザーに認知してもらう取り組みを続けています。能登ヒバの眼鏡フレーム、樹皮から作った手すき和紙の名刺や壁紙などを共同で作成したり、市内建築物での利用やマスメディアで取り上げてもらうなど、ブランド化に取り組んできました。

今は県内製材業者の方々とチームになって、能登のスギも含めた県産材を使ってもらう活動に特に力を入れています。公共物件に取り入れてもらえるよう様々な会議に出席して、県産材をプレゼンするなど、金沢城の河北門や、最近では、新しい県立図書館などの県産材供給に汗をかいてきました。

こうした公共建築物向けには、フローリングや羽目板、ルーバーなど膨大な量を調達する必要があり、また、関係者の利害調整は難しいことですが、売り手、買い手、地域の三方良しの考え方が大切だと思っ取り組んでいます。

○能登ヒバの魅力については。

能登ヒバには、シロアリ、ダニなどの防虫効果、カビなどの抗菌効果、ヒノキに勝る強度、水、湿気に強いことや光沢と香気があることなど様々な特徴があります。そのような

能登ヒバの高級感を生かすため、乾燥時の内部割れを防ぐなど、当社では独自の工夫を凝らしています。

また、ヒノキの値段が下落傾向のなかでも、ブランド化の定着により能登ヒバの評価が高いことから、値段は比較的安定していると思っています。能登ヒバを核にして商売したからこそ、同業者の数が少なくなる中で、鳳至木材が今生き残ることができたと考えています。

そして、能登のヒバは能登にしかなく、ここでどんどん使うことにより能登の林業が成り立つと思っています。

○林業・木材産業に今思うことは。

最近、コロナ禍のウッドショックで木材の価格が上がっていますが、外材でなくもっと地元の木を使う健全な流れができてほしいと思います。また、せっかく長い年月をかけて育てた木を、バイオマスなど価格の安いものに使ってしまうのは、建築に使って、山主へ還元できるお金を増やすよう努めるべきだと思います。

川下側については、目先のことで、安ければ何でも良いという風潮ではなく、森林が持つ多面的な役割などが大事なことを納得して買っていたら、林業・木材産業の発展につながると思っています。(県奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

100年以上続く伝統工法で木の魅力を伝える職人集団

(株) 沢野建設工房 代表取締役 澤野 利春 さん

かほく市七窪にある株式会社沢野建設工房は、明治16年(一八八三年)に創業した河北郡市の大手木造住宅業者です。今回は、現在、県内で最も多くの社員大工を抱え、昔ながらの伝統工法を守りながら家を建てている澤野利春代表取締役にお話を伺いました。



澤野代表取締役
(会社の玄関前)

○現在、社員大工は何名ですか。
当社の社員大工は18名います。見習い大工から70代まで幅広くおり、毎年、見習い大工を募集しています。県内の工業高校や普通高校を卒業して入社する人や隣の富山県には、大工と植木職人の育成を目的とした職業学院という専門学校があり、全国から生徒が集まっています。そこで

大工の基本的な技術を2年間学んだ卒業生も現在3名います。

○昔ながらの伝統工法とは。

前提の話として、私が今考える家づくりというのは、「元々の原点として建物に求められていた事は、家族を守る器(うつわ)が住まいということです。」原始時代、縄文時代、弥生時代からそうであったが、今、本当の意味で家族を守る器が、そういう住宅になっているかと考えたらそうならない。

なぜかという、住宅の高気密・高断熱化が進み、たくさんの化学物質や工業化製品で作られた家では、人間が生活していくと一番大切な健康が奪われるような空間が出来ている。それを真に家族を守る器である家を提供する中で、人間が求めている事のマイナスの部分の器を「素敵や」、「かっこいい」、「値段が安い」、「値段が高い」とかで提供していくのがいやでした。

当社では、伝統工法というのは、化学物質、工業化製品を出来るだけ使わないこととフレカットをしない

ことによって、大工職人が知っている技術の中で、製品をチョイスしていく目利きを持った人間がやれるという事で、墨付け、手加工、具体的には、継手・仕口(しぐち)を手刻みで加工しています。

それによって、私たちが求めている家づくり、お客様にとって真に良い家というのを提供できると思っています。

○県内で、この伝統工法(墨付け、手加工)で家を建てている住宅業者は他にありますか。

会社組織としてやっているところはないと思います。当社では、若い大工職人の墨付けと手加工によって建てた「伝承棟」があり、伝統工法の本組みや手加工を次世代に教え伝えていけるように取り組んでいます。



伝統工法 伝承棟

○使用する県産材の割合を増やしていくため、供給側に望むことは何ですか。

能登ヒバを比較的多く使っていますが、丸太を安定的に供給してもらい、製品の品質の確保をして欲しいと思います。

全国の流通を見ると、本県の県産材のコストは高く、製品としてどれだけ取れるのか。製材すると大体1/3ぐらいが製品になり、歩留まりに課題があります。

例えば、ウッドショックになる前は、県産材製品が1㎡当たり6万5千円していたら、三重県とかのヒノキ材は1㎡当たり5万5千円〜5万5千円で県産材より必ず安かった。それだけ大量に出ているから安く売れる。なぜ普及しないのか、流通を安定させてほしい。県内の木材市場に出ってくる材が少ない。能登ヒバは大部分ブランド化されてきたが、スギ材については、全国で流通している製品価格は、県産スギの価格よりも安い。価格も全国と肩を並べるくらいにならないと難しく、それには、製材コスト等が影響している。

もっと県産材をPRして、その材の特性や特質を普及啓発しないと広く浸透していかないと考えています。

(県県央農林総合事務所森林部)

この人に聞く

「木は長く気も長く100年以上続く2年熟成醤油」

近岡屋醤油株式会社 おかみ代表取締役 近岡 志緒美 さん

ヤマチ醤油として販売している近岡屋醤油株式会社は、大正8年に創業した宝達志水町今浜にある町内唯一の老舗醤油店です。

昔ながらの杉樽木桶で、醤油を造り続けているおかみの近岡志緒美さんにお話を伺いました。



おかみの近岡志緒美さん

○400石のもろみを天然醸造している小さな蔵

全国的に製造業では、組織の大規模化や機械化が図られています。近岡屋醤油は昔ながらの木造の蔵で、創業以来大切に使用してきた杉樽木桶や麻布などを使って醸造をしています。

一般的に機械化された醸造所では6ヶ月程度で出荷しますが、当社は



杉樽で2年間じっくり自然発酵させてから出荷しています。醤油の味となるもろみを搾って得る生揚(きあげ)は、昔ながらの製法で造っています。

○蔵や杉樽木桶に宝ものが棲む

杉樽木桶などは明治18年から続く蔵の中で100年以上使われており、代々の蔵人達の醤油造りを見守ってきた酵母菌や乳酸菌などの微生物が、蔵や杉樽木桶等に棲んでおり、かけがえのない大切な宝物となっています。



杉の木桶 継ぎながら醤油造りをしています。

○地元こだわった醤油づくり

970年代をピークに出荷量が年々減少してきており、当社も例外ではありません。創業以来、地元の方々能登の気候風土などに支えてもらい



ながら、地元の蔵人による杉樽仕込みの醤油づくりを海風と時のたから

守り続けています。

天然醸造醤油「海風と時のたから」は、創業当時に立ち返り、厳選された町内産の素材を贅沢に使い、杉樽で2年間じっくり熟成することでできた商品です。

○地元の木にこだわる

この醤油醸造所の蔵は明治時代から昭和にかけて建築されたものがありますが、4代前の当主が当時砂丘状態であったこの地に松の植栽を積極的に行い、屋敷の防風砂林を造成し建築したものです。

私が嫁いだ頃の海岸の松林は、海からの風によって内陸側に大きく傾き、なんて綺麗な松林だろうと思っていました。最近では松くい虫の被害でスカスカな松林となっており非常に残念でなりません。

明治時代から使用している木桶は、蔵の形に合わせて作られているため容易に交換はできません。

また、木桶には菌類が棲んでいますので、古くなったからといって全て交換してしまうわけにはいきません。杉の樽や桶は現在27原(個)使

用していますが、使用していない6原については水漏れ等で使用できない状態のものもあります。

今後、交換や修理などを検討しなければならぬのですが、地元の杉で樽や桶を製造・修理できる職人がおりません。当社の存続にかかわることですので、是非、県内で杉の樽や桶を作る職人が育つことを願ってやみません。

△編集後記▽

10月8日は「木の日」ですが、10月1日は「醤油の日」であることから木との深いつながりを感じます。

杉樽木桶は、日本酒や醤油、味噌、酢など、食生活に関係する色々なところで必要とされており、国内には木桶や木桶職人を確保するための活動をしているところがあると聞いています。

今回の取材を通じて、これらの材料となる木材を生産する人材や木桶など木材を加工・利用する人材を確保・育成する、より一層の取り組みが必要であると考えています。

こだわりの杉樽木桶の天然醸造蔵の情報は、こちら

<https://www.yamachi-shouyu.co.jp/>

近岡屋醤油おかみさん日記 <http://sugidaruru.com/>

(県中能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

風土や文化に根づいた音を奏でるギターづくり

近撥弦楽器 店主 近信濃さん

小松市大文字町にお店を構える「近撥弦楽器」は、クラシックギター（以下「ギター」）、ウクレレの製作等をしている工房です。この工房の店主である近信濃さんにお話を伺いました。



近信濃さん
(能登ヒバで製作した表板)

○ギター製作を生業にしようと思った経緯を教えてください。

東京都に生まれ、学生時代から独学でギターの修理や製作をしていました。社会人になってからも建築会社に勤める傍らギター製作を続け、2009年に「近撥弦楽器」を設立し、本業としてギターやウクレレの製作を開始しました。2011年に妻の実家がある石川県小松市に移住し、2019年4月には工房を新し

くしました。現在、この工房で作業しています。



心を込めてギターをつくる



お店に並ぶ様々なギター

○ギターづくりのこだわりを教えてください。

これまでは弾く方の手の大きさ・音やボディシェイプの好み・材料・スケールなどに合わせ、フルオーダーにより注文を受けていましたが、フルオーダーだと時間と値段がかかるので、今年11月からセミオーダーによる受注も開始しました。セミオーダーではデザインだけ統一し、フルオーダーと同じ精度や材料で値段を下げた製品を提案しています。

ギターの正面に見える表板は、音を出す上で最も重要な部材です。この表板で空気を振動させ、ギター本体から音を出します。このため、表板の製作中は叩きながら音の振動を

確認しつつ、作業をしています。

木材以外もこだわっており、できるだけ合成接着剤・合成塗料を使用せず、天然素材のものを使用しています。一本のギターが完成するまで、フルオーダーで3ヶ月から4ヶ月、セミオーダーで2ヶ月半から3ヶ月かかります。

○能登ヒバをギターに使おうと思ったきっかけや、能登ヒバとギターの相性について教えてください。

ワシントン条約で、今まで自由に使用していた外材が使えなくなったことがきっかけです。外材に替わって、国産材でも遜色ない音を奏でるものがないか研究しており、桐や能登ヒバなどの新たな素材に挑戦しています。ギター製作に一番適している木材はジャーマンスプルースなのですが、能登ヒバはこれと比較して遜色なく、材として粘り気があり、音とサステイン（余韻音）がとても美しく、ギターとの相性が良いです。

なお、国産材は繋がりのある家具屋の方を通じて仕入れています。

○能登ヒバをギターに使う際の工夫を教えてください。

通常、ギターの表板に使用する木材は大径材を使用し、2枚の板をつなぎ合わせて1枚の表板を作ります。しかし能登ヒバは、大きい径のものが入りにくいので、3枚つな

ぎ合わせて表板を作るなどの工夫をしています。3枚のつなぎ合わせでも、きれいな柀目のものであれば問題ありません。近年能登ヒバは、径の大きなものがある程度に手に入るようになったとの話を聞き、これから使用の幅を広げていきたいと考えています。

○今後の展望をお聞かせ下さい。

ギターは、世界各国にその地域に根付いたものがあります。私もこの日本国内で石川県の木材を用いて、地域の風土や文化に根付いた音を奏でるギターを作りたいと考えています。令和4年1月には阪急百貨店うめ

だ本店（大阪市）で、展示販売会に出店します。この時に、能登ヒバのギターや端材を活用したブローチも持参する予定です。このような活動を



端材を活用したブローチ
を通して、石川の魅力を伝えるとともに、SDGsに貢献していきたいと考えています。

近撥弦楽器

【連絡先】

info@konhatsugengakki.com

【URL】

https://konhatsugengakki.com/

(県南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

薪で焼いたピッツアとこだわり雑貨の店

「もく遊りん」 福江 翔太 さん

「もく遊りん」は、白山市獅子吼高原のふもと自然あふれる森の中にあります。今回は、もく遊りんでの木の雑貨を販売する「木工房」と、素材を活かしたピッツアを味わえる「食工房」の企画・運営に関わる福江翔太さんにお話を伺いました。

○ここで働くかと思っただけは、何ですか。

もともと、大手アパレル会社に就職しており、店長として全国の店舗を渡り歩いていました。長男の誕生を機に、転勤の無い仕事に就きたいと考え退職し、地元である小矢部市に帰りました。DIYが好きだった父親の影響もあり、家具職人を目指すことを決意し、職人学校を経て2014年に株式会社角永商店に転職しました。

当時は、無垢の一枚板でオーダーメイドのテーブルを作っていました。オーダーメイド専門店であったことが良い経験になりました。学校で学んだ何十倍もの木に触れることができ、15年くらいの経験をたった3年



「フクフク」を持つ福江翔太さん

で出来たと感じています。

お客様の要望を伺いながら製作したテーブルを納め、喜んでくださる姿を見た時の感動はこの上ないものです。木はものすごくかっこいい素材だと思います。ヒビ割れたり、曲がったり、反ったりする性質も含めて木材の良さを理解してもらえればと考えています。

2017年からは、もく遊りんの企画・運営を任せられました。この仕事も、木の良さをお客様に伝えられることにやりがいを感じています。

○商品へのこだわりはありますか。

角永商店の製材部では、1日4トンの端材が発生しています。この端材を使って何か商品化できないかとずっと気になっていました。黒板を作るワークシヨップでヒントを得て、黒板消しやホコリ取りに使える「フクフク」をスギの端材を使い商品化しました。

おかげさまで評判も良く、全国展開する雑貨店でも取り扱っていただいています。「フクフク」に使用しているスポンジは車の座席にも使われている、へたりにくいもので、布の部分は倉敷で作られたものを採用し、1個1個手作りしています。

また、外箱は、メッセージを書いて贈ることができるようになっており、外箱を組み立てて「フクフク」置き場として使用することで、使うたびにメッセージを見もらえるような工夫をしています。値段は、決して安くはないですが、このような付加価値を付けていくことで商品の価値が高まっていくと考えています。

さらには、木材だけで商品を作るのではなく、他の素材と組み合わせることで木の良さが際立ちます。鉄、プラスチック、布など異素材を組み合わせることで、木材業界以外の方々にも木材の良さが波及していきます。



スマホなどのホコリ取りに

○木工房にはどのような商品がありますか。

もく遊りんではピッツアが人気で、食工房に食事に来られたお客様が待っている間に木工房にも足を運んでいただけるような商品をそろえています。

1階には、女性をターゲットとした木のおもちゃやかわいい小物を、2・3階は、木を使って遊ぶことをテーマに、DIYグッズ、キャンプ用品などをメインに県内ではあまり見られないものにこだわった商品が置いてありますので、是非、遊びに来て下さい。

これからも、異業種の方と一緒に活動を行うことで、新たな刺激を受けながら木材の良さを広めていきたいと考えています。

(県石川農林総合事務所森林部)

この人に聞く 「能登の木を生かす家具づくり」

Suzu Woodworking Studio 家具職人 辻口 洋史 さん

辻口洋史さんは、珠洲市三崎町で昨年から独立して仕事を始めた、津幡町出身の若い家具職人です。地域の材料を使った奥能登での家具づくりの取り組みについて、辻口さん（写真1）にお話を伺いました。



写真1 辻口 洋史さん(工房にて)

○この仕事を始めたきっかけは。

地元の工業高等専門学校で建築学科卒業後に、東京でインテリアデザインを学ぶ過程で、自らの手を動かす物づくりの楽しさを知り、家具を製作したいと思うようになりました。

その後、首都圏の造作家具の製造会社での勤務を経て、ドイツで無垢材の家具づくりを学んだ後に、石川県内で無垢材を使用するオーダー家具製作会社で働きました。

独立を志向して、比較的工房となる建物が入手しやすく、また、友人の勧めもあって珠洲へ移住することにしました。珠洲では、木材の生産現場を知りたいという考えから、能登森林組合で約5年間働きながら家具製作を続けてきました。

その時には、林業に必要な様々な資格を取得して間伐等の現場の仕事をごなす傍ら、休日には家具づくりに励んでいました。森林組合の仕事では、実際に木を伐採する現場を経験したことで、今まで以上に木を大切に扱って家具作りに取り組みもうという気持ちが強くなりました。

○今、どのような家具づくりをされていますか。

注文を受けて作る家具と、地元の製材所や東京のデザイナーの方と協力して、地元の材料にこだわって作る家具の2本立てで、主に取り組んでいます。

後者の取り組みとしては、今年1月に、Aemonoプロジェクトとして、能登のスギで作ったテーブルとソファアール5セットを東京のオフィスに納入しました（写真2）。

このプロジェクトは、珠洲の製材所と私、東京のインテリアデザイナーと空間デザイナーの知恵と地域の素材、作り手の技とを「和え物」のように組み合わせる独自の製品を作

る取り組みです。



写真2 能登スギで製作したテーブルとソファアール

また、これ以外の取り組みとしては、里山チェアがあります。

これは、地元の大工さんが保管していた地元の木材を譲ってもらい、椅子を作るとともに、製作過程を本にして、椅子と一緒に納品する取り組みとなります。

里山チェアの第1作目（写真3）は、写真家とデザイナーの友人2人との共同作業で、地元の材料にこだわって椅子と本を作りました。

椅子本体にはケヤキを使い、椅子の背もたれや座面にはイノシシの皮を使うとともに、本の紙にはスギの樹皮をすいたものを使用しました。

更に、最近では、珠洲市内にリニユールオープンするカフェの内装空間一式を、デザイン込みで作り上げる大きな仕事もしました。



写真3 里山チェア

○能登の木についての思いは。能登では、森林が身近にあり薪をよく使うなど、生活の中に自然と木があります。

現在、能登地区では、伐期を迎えた太いスギが多く生育しています。

その一方で、以前に比べて新築の住宅件数も減り、必然と木材も使われなくなり、木の使い道が減っているのが現状です。

今まではあまり家具に使われてこなかったスギを活用することで、新たな木材の活用法につながるのと思っています。

○今後の抱負をお聞かせください。全国に家具職人は多くいると思いますが、林業を経験した家具職人はあまりいないように思います。

私は林業を経験したからこそ、スギの木が余っている現状や山から木を伐りだすことの苦労と尊さを知ることができました。

その経験を生かした家具作りを、ここ珠洲市で取り組んでいきたいと思っています。
(県奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

石川の木を活かす木地づくり

ホオリ 生地 史子さん (木工作家・挽物木地師)

生地史子さんは、小松市那谷町で「ホオリ」という名の工房を構え、この仕事を始めて12年になる小松市出身の木地師・木工作家です。過去には石川県デザイン展で入賞した技術をお持ちです。石川の木を使った南加賀での木地づくり、木工について生地さんにお話を伺いました。



生地 史子さん (工房にて)

○この仕事を始めたきっかけは。

高校生の時にこれからの時代を考へ情報学を学びたいと思い、静岡の大学へ進学しました。大学では情報学の中でも博物館マネジメントを専攻し、学芸員を目指しましたが、募集が非常に少なく就職が難しい状況でした。また、一日中パソコンの前でデスクワークを続けるような事務仕事は不向きだと考えるようになりまし。自然とのつながりが多い祖母や両親の影響を受けて元々工芸な

どのものづくりが好きだったことや、母からの勧めもあり、木地師・木工作家の道に進むことに決めました。大学卒業後は、全国的にも大きな漆器産地である山中の県立挽物輪軸(ろくろ)技術研修所で4年間技術を学びました。また、研修と平行して2年間山中漆器の伝統工芸士である佐竹一夫氏のもとで見習いをしました。研修所を修了後、更に1年佐竹氏の見習いを続けた後独立し、約3年前に現在の工房で製作を行うようになりました。

○今、どのような作品づくりをされていますか。

山が好きで、屋号のホオリは山の神様「火遠理命」(ほおりのみこと)の名前からとりました。小松市の里山地域である那谷町は地元の方々の交りや暮らしがしやすく、落ち着いた木地師としての仕事ができる環境です。

木地の原木については、サクラやクルミの材が人気ですが、欲しい材を必要な量だけすぐに入手することは難しく、南加賀地域の様々な木材業者、造園業者等の方々に、事前に

未利用材の提供をお願いし、入手しています。

加工の工程については、原木を人工乾燥するか、または1年間程天然乾燥したあと、輪軸などを使って木を挽き、研磨、塗装をします。木を挽くときの刃物は自作しています。また、刃の研磨は特に重要な準備作業で、切れ味を確かめながら形や角度に気をつけて研いでいます。



作品のお皿やスプーンなど

コロナ禍で、都会でのイベントが減り、百貨店などの販売が少なくなりました。代わりにインターネットでの販売に移行しています。また、これまでは漆器店などの下請けの仕事が多くありましたが、これも少なくなり、最近は自分で創作する仕事を増やしています。

コロナ後は、一般の人を対象としたワークショップを開催し、手挽き輪軸などで木工体験を楽しんでいた機会を設けていきたいと考えています。このような取り組みを通して、身近に使った木工作品の良さを知っていただきたいと思います。

○石川の木についての思いは。



スギで作った大皿と削る前の板

木地には硬い広葉樹が向いていますが、大きめの作品には針葉樹も使用できるので、石川のスギやアテも工夫して使い、お皿やお盆、茶碗を作っています。特にスギは木目が美しいので、スギをうまく使うことで、石川の木の新たな活用法につながれば良いと思っています。

また、石川の木を深く知るために、実際に現場に行つて山の手入れ方法など林業について勉強していきたいと考えています。

○今後の抱負をお聞かせください。

木地に主に使う広葉樹は、寸法の大きい作品を上手に作るために乾燥が大切です。周囲の皆様からご指導をいただきながら、設備も含めて自然乾燥や昔からの燻煙乾燥、人工乾燥など、使用する木に適した乾燥環境を整えていきたいと考えています。また、私が携わっている木工品をはじめ様々な用途で、余すことなく石川の木を活用し、広葉樹も含めた森林資源を循環させていくことが大切だと思っています。

ホオリ【URL】

<https://www.funiko-s-woodturning.com>

(県南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

創業100年・タイニーハウスで新たな県産材の利用促進

土田製材所 代表 中町 裕帆 さん

志賀町火打谷地区で製材業を営む土田製材所 代表 中町裕帆さんにお話を伺いました。

1 過去

土田製材所は、大正10年に曾祖父が事業をはじめ、昨年で創業100年を迎えました。私が生まれる少し前（昭和48年頃）までは、祖父は山を買って、馬を使って木を伐り出していたそうです。祖父と祖父に抱かれた姉、馬が写る写真が残っていて、当社のホームページでも紹介しています。



代表の中町裕帆さん

私は高校を卒業後、大学進学で東京へ行き、卒業後も10年ほど木材とは別の業界で働いていました。実家から祖父母が高齢で仕事ができなくなってきたと聞き、帰郷して製材所で働き始めました。当時は、別荘の新築などの

仕事がたくさんありました。幼い頃、私は学校から帰ると工場で遊んでいたため、製材業の仕事は知っていたつもりでした。実際に働いてみて初めて、体力を使う大変な仕事だと分かりました。

2 現在

8年前に父から経営を引き継ぎ、私で4代目となります。木材は県産のスギやアテを使うようにこだわっていて、主に、穴水町の木材市場へ買い付けに行っています。

現在、能登地域では市場が1箇所になり、開市日は2週間に一度だけなので、欲しい木材がない場合は、お客様にお待ちいただくこともあります。最近では、地元の森林組合などが近くで伐採をするときに声をかけてもらい、トラックで直接山土場へ買い取りに行くこともあります。数年前から、2畳から6畳ほどで趣味のスペースや店舗として活用できる『タイニーハウス』の製造販売設置をはじめました。最初は、工場内の物置小屋として作りました。木のぬくもりを感じる

コンパクトな空間なので、ゆったりと自分らしい時間を過ごすのに良いのではないかと考えたことが、販売に至ったきっかけです。

弊社の強みである『お客様の希望に応じた対応ができる』ことから発展した商品で、土台にはアテ、柱や下見板にはスギやヒノキを使用し、完全受注製造をしています。



工場で見組み立てるため現場施工が早くローコスト



タイニーハウスをイベントでPR

これまでに、家庭用の駐輪所や倉庫、スイーツやエンジンジリングの店舗など、県内外から様々なご注文をいただいております。外壁をカラフルに塗装したり、調理器具やシヤワーなどの設備等にも対応しています。また、取り壊される学校や住宅から収納棚、引き戸、椅子など

を引き取り、木材部分や金具を修理したアンティーク品の販売も行っています。

ホームページを見て連絡が来ることもありますが、タイニーハウスと一緒に使って下さるお客様もいらっしゃいます。

3 未来

夢のひとつは、山の中にたくさんの「タイニーハウスが建つ小さな街」が生まれる空間を創ることです。そのために、工場の近くの山の一角で不要な木を伐採したり、草を刈ったりして準備を始めています。

私以外に5名（フルタイムでない方を含む）が働いていますが、タイニーハウスの注文も軌道に乗ってきたので、新たに1人雇用したいと考えています。

○あながき

中町さんには、県緑化センター（志賀町）で伐採したアテを使用し、原木の形を活かしたセンター入口の標柱やベンチの製作に協力をいただきました。

これからも火打谷地区が、森林資源を活かして人が集まる地域であり続けることを期待しています。（県中能登農林総合事務所森林部）



この人に聞く

宮大工の技を継ぐ家づくり

株式会社済田工務店 代表取締役棟梁 済田 稚博 さん

白山市明島町に会社を構える株式会社済田工務店は、この地で100年続く工務店で、個人住宅や社寺を建築しています。代表取締役棟梁である3代目の済田稚博さんにお話を伺いました。



済田工務店のみなさん
(右から2人目が済田代表取締役棟梁)

○社長さんの職名にある「棟梁」という文字には、どのような意味があるのでしょうか。

初代である祖父が、工務店を経営し、祖父自身も宮大工として神社仏閣の建築を手掛けており、私は自宅横の工場で、祖父が宮大工の作業をしているのを見て育ちました。

しかし時代が流れ、宮大工の仕事

が減り、職人の技術の継承が危惧される中で、私自身が技術を継承していかなくてはと思い、21才から富山県砺波市で6年間宮大工の修業をしました。

その後、27才で工務店を継ぎ、現在は12人の大工がいます。「棟梁」とは、大工を取りまとめ、建物の設計から施工まですべてができる統括責任者を意味します。「宮大工」とあるとともに「棟梁」として、仕事に取り組むという思いを込めて名乗っています。

また、現在でも白山比咩神社の住吉社の建築や、金劔宮の改修などを施工しており、宮大工としての仕事も少ないながらも大切にしています。

○近年、県産材を活用した住宅を多数施工されていますね。
令和5年度は27棟建築し、全棟で県産材を活用しており、土台に能登ヒバ、桁に県産スギなどを使用しています。

施主さんには、地域の山から出された木であることをPRしています。モデルハウス「どんぐりの家」に使用している木は、能登の山まで行き自分で選んでいます。

そうした経験も踏まえ、お客様に

は能登ヒバやスギの良さを伝えていきます。今後も年間30棟を目標に、県産材を活用した住宅を建築していきたいと考えています。



モデルハウス
「どんぐりの家」

○お客様へは、どのようにPRしていますか。

主に、Web上の会社HPにてPRしています。HPから弊社の建築意匠に興味を持って来て下さる方が多く、弊社に足を運んでいただいた方には、ワークショップを実施しています。ワークショップは建築後の施主さんも対象としており、住宅のメンテナンスを気軽に相談できるよう工夫しています。

また、白山主催の小学生の職業体験イベントや、県主催の「子育て支援メッセ」など、各種イベントには積極的に参加しています。イベントでは、大工体験として木組みのジヤングルジムの組み立てなどを通して、木の良さを感じてもらいました。

このような活動を通じ、少しずつお客様と繋がりを作っています。



ワークショップ
うさぎのイスづくり

○今後の展望についてお聞かせ下さい。

宮大工の技術を継承し、住宅建築にその技術を活かしながら、木の良さ(癒し・香り・音・手触り)が住む人を包み込み、優しい時間が溢れる、そんな家を一人でも多くの方に提供していきたいです。

また、自分が生まれ育った鶴来の魅力も多くの人に知ってもらい、賑わいも創出したいという思いから、カフェを併設した木の遊び場を、この夏のオープンに向けて準備を進めています。

子供達が木にふれあい、大人には鶴来が育んできた麹などの発酵食を用いたランチやスイーツを楽しんでもらい、家族でくつろいだ時間を鶴来で過ごせる、そんな施設にしたいと思っています。



済田工務店

(県石川農林総合事務所森林部)

この人に聞く

「能登地域における唯一無二の木材チップ工場」

株式会社家村商店 代表取締役 古山 幸一 さん

1 はじめに

七尾市万行町に位置する「株式会社家村商店」は、限りある資源の有効利用を図るため、木材チップ製造と木くずに特化した廃棄物処理とリサイクルを行っています。

令和6年1月1日に発生した能登半島地震により、自社の施設等にも大きな被害を受ける中、令和6年の1年間は、ほぼフル稼働で震災復旧工事由来の木材等を受け入れてきました。

今回、業務多忙の中ではありましたが、能登半島地震による被災状況とその影響や今後の事業展開について、お話を伺うことができました。

2 株式会社家村商店について



古山幸一 代表取締役

株式会社家村商店は、昭和50年9月に設立し、現在、9名の従業員で営業をしています。事業内容は、木材チップ製造と産業廃棄物、一般廃棄物の中間処理及び

収集運搬のほか、家屋解体や木材リサイクルです。木材チップ製造と木材リサイクルの実績は、震災前までは丸太換算で年間6000m程度となっており、工場でチップ化し、近隣の各製紙メーカーへ出荷していました。

これが、令和6年能登半島地震の影響で、当社の事業すべてが一変してしまい、当面は、災害復旧の対応を最優先に取り組みこととしています。

3 能登半島地震による被災状況とその影響について教えてください

当社の工場敷地が海沿いにあるため、地震により敷地全体が隆起し、至るところでひび割れが発生しました。また、事務所棟が傾いてしまったほか、倉庫2棟が倒壊し、チップ保管庫も損壊してしまいました。

震災後、すぐに損壊した建物の木材などが次々と運び込まれたため、この傾いた事務所で3ヶ月間寝泊りしながら、受け入れの対応をせざるを得ず、自律神経にも影響が出てしまいました。

被災状況



木材チップ棟建屋の破損状況



木材チップ製造機の水没状況

電気系統と制御系統が機能しなくなり、施設そのものを入れ替えなくてはならない状況になってしまいました。

また、これに付随して新たな変電施設が必要となるため、今後、キューピクルの入れ替えも行う予定になっています。

この地下水の漏水は問題ではあったのですが、自身の家も含め社員全員の自宅が断水したことから、この工場の漏水した地下水を活用して、全員の風呂や洗濯等をまかなえたことが助けにもなりました。

現在も、復興に向けた公費解体により発生した木材の受け入れを最優先としなくてはならず、それら以外の受け入れができない状況となっています。皆様のご要望にお応えできない状況になっていることを心苦しく思っています。

4 今後の事業展開について

現在、傾いた事務所は解体し、新



新たに建てられた事務所棟

工事も着手しています。

地震の影響もあってか、奥能登地域で稼働していた木材チップ工場が閉鎖されたと聞いています。当社としても、現状の震災への対応がひと段落したら、公費解体により発生した木材以外の受け入れを再開し、地域工場や土木工事、公共事業に付随して発生する支障木等を木材チップに加工し、近隣の製紙工場へ出荷していきたいと考えています。

さらには、受け入れる原木規格の統一などにより、将来的にチップ製造の効率化と省力化を図り、今よりもやりがいと楽しさを感じられるような会社にしていくことを考えているところです。

(石川県中能登農林総合事務所森林地部)



製紙用チップ原木の受け入れと出荷状況

この人に聞く

「木と布の融合で未来を織る」
株式会社谷口の挑戦

能登半島の中央に位置する穴水町に工場を置く株式会社谷口は、「木材を『布』のように加工する独自技術」を核に、製品の付加価値を高めながら木の文化を次世代へつなぐ挑戦を続けています。

令和6年能登半島地震で工場は甚大な被害を受けましたが、社長の谷口正晴さんと職人達は前を向き、地域とともに復興と再出発を図っています。

創業から78年。碁笥(碁石の器)づくりからスタートした(株)谷口は、「木を布にする」という革新的な技術で国内外に注目されています。木材を薄くスライスし、柔らかさと耐水性を持たせることで、洋服やバッグ、雑貨など生活の中に溶け込む製品へと生まれ変わらせています(本誌2022.6月号参照)。



谷口 正晴 社長

自然素材としての魅力を損なわず、木の新しい可能性を開いてきた谷口社長は「木の布はSDGsの究極形です」と語ります。

●シート加工と製品づくりの現在について

【谷口社長】能登ヒバや杉、黒柿など多様な樹種で作られるシートは、柔らかさを保ったまま曲げやすく、汚れにも強い仕上げを追求しています。デザイン学校などの協働やセレクト店大

手のBEAMSとのコラボでは、能登ヒバのトートバックやカードケースといった木の質感と機能性を両立させたアイテムが生まれ、ホテル向けのクッションカバーなどの試作にも取り組んでいます。

また、不燃・準不燃の認定を受けた木製の壁紙も開発し、消音パネルや曲面への追従性も検証しており、「貼って曲げて使える木」の内装材の開発も進めています。



“縫える木”のクッションカバー

●地震後の混乱期、再建、そして今の状況について

【谷口社長】令和6年能登半島地震で穴水の工場は2階が崩落し、機械は泥にまみれました。社員の避難が続く中、工場で一人残った職人の寺田和樹さんに「工場を続けるか」と電話した際、「穴水で木工に携わっていきなさい」との返事を受け、工場の移転・再建を決定しました。

板金関係の仕事をしてきた寺田さんは、父が輪島塗職人、義理の父が大工だったこともあり、木工の世界を志して震災前に(株)谷口に入社した若手の職人です。寺田さんは使える機械を運び出して磨き直し、再稼働にこぎつけたことで、「先のこととは考えられないけど、とにかく片付ければ何とかなる」との思いでした。と当時を振り返ります。その後、同じく父が輪島塗職人だった畠中勇樹さんも加わり、二人で製品の生産を再開されました。

【寺田さん】木工は感覚が頼りです。経験の浅い自分達は、再スタート後は失敗の連続でした。さらに、移転した工場は元精米倉庫の建物で、湿度・温度管理や材料保管が難しく、移転前よりずっと狭いので、生産効率は震災前の3〜4分の1ほどです。それでも前職の経験を活かし、「寸法を図面に起こして形にする」ことで、職人の感覚に頼るだけでなく品質を安定させるようにしています。



畠中 勇樹さん(左)と寺田 和樹さん(右)

また、工場再開に向けクラウドファンディングを行ったことをきっかけにSNSにも力を入れフォロワーは数十人から現在は数百人と増加し、応援者・協力者・顧客との新しい繋がりが生まれています。

「地震で壊れた木の看板を何かにできないか」という依頼もあり、できる限り対応したいと思っています。焼却炉がなくなったことで、地元の畜産農家にオガコを使ってもらえるようになりました。碁笥の生産全国一だったことで、クラファンを見て穴水を訪ねてきてくれた碁笥好きの方もいます。少なからず地震からの再起が、谷口という会社を知ってもらうきっかけになったように思います。

●今後の展望について

【谷口社長】住宅だけではなく多様な商品により、木の良さを体験してもらわないと木の文化が消えてしまいます。それには、木材に付加価値を付けて販売し、木材の価値を高めていく手法が

必要です。現在、5年計画で若手に経営や販売のノウハウ、木材の見方などを教えています。次の世代が、新しい木の文化を築けるよう道筋をつけるのが自分の使命です。

【寺田さん】会社を離れてしまった先輩や他の地域の職人に、積極的に技術を教えてもらうなど試行錯誤しながら最近ようやく手応えを感じ始めています。社長は週一で穴水に来て作業や製材もしますし、自分達が失敗しても怒らずにフォローしてくれるので安心感があります。

社長は何事にも諦めずに挑戦し続けるので、こちらもすぐ前向きになります。地震後は普通に仕事をしていただけでは経験できなかったことが沢山あり、多くの人との繋がりが持てました。それには社長のポジティブ精神が大いに影響していると思います。

将来的には、ワークショッパや見学スペースを備え、誰もが気軽に訪れ木の良さを体験できる「オーブンファクトリー」が作れたらと思います。物づくりと地域の観光をつなげる拠点にしたいです。県内の他の木工所とも協力してイベントもできたらいいですね。会社の創業100周年まであと20年ちよつと。社長が今まで開発にかけてきた成果を、いろいろなものに転換していければ、木工業だけでなく林業も盛り上がると思います。

(編集後記) 木材の価値を高めて、木を育てる人・伐る人・つくる人・売る人が持続可能に繋がる市場を再構築する。能登から世界へ。震災を機に培ったつながる力を、資源に『木の文化を未来につなぐ』(株)谷口の挑戦を応援しています。

(石川県農林総合事務所森林部)

この人に聞く

建具の町の里山整備

まちなか里山公園づくりの会 代表 山元 広隆 さん



七尾市田鶴
浜町の東嶺寺
の裏山でボラ
ンティア活動
を始めた「ま
ちなか里山公
園づくりの会」代表の山元さん
にお話を伺いました。

●田鶴浜は建具で有名ですが東嶺寺との関係は

東嶺寺は、かつてこの地方の領主の菩提寺として2人の指物師により建立されたことが田鶴浜建具の発端となりました。優れた技術を持つ2人に村人が競って弟子入りし、それ以来、精巧で優美な細工と高度な仕上がりを持つ田鶴浜建具の製造が始まったという逸話をもつ由緒ある寺です。



田鶴浜建具の発祥のお寺

寺は町の中心部に位置し、周辺には豊かな自然を有している貴重な森林がありますが、檀家の人々を含め、手入れを行う関係者も少なく、さらに高齢化が進んでおり、このままでは町のシンボルの寺やその周辺の

里山の自然がなくなってしまうと心配されているところです。

●ボランティア活動の大変なことや喜びは

会の立ち上げは平成23年度からですが、最大の悩みは「一人」「物」「金」を如何にして賄うかでありました。そもそも立ち上げたメンバーは素人で道具は鉦か刈払機しかなく本格的な作業を行うには人も資材も不足しており、私自身も活動資金の確保に奔走していた感がありました。

そんな中、七尾市や県から補助事業の採択を受けることが出来たことや賛同者が増えたことが一番の喜びです。

賛同者の中には、重機のオペレーターや自動車整備の経験者があることから本格的な作業も可能になりました。

今では、バックホウ等の重機を使い、歩道の整備や間伐材の搬出、竹のチップ化などを行い、荒れていた森林は見違えるほどに変わりました。

●これからの活動展開と将来目標は

現在の会員は30名程度で、月2回を定例として山作業を行っています。

今後は、子供たちの遊び場や



侵入竹の伐採除去

遊歩道の整備を行い、四季折々の里山散策ができるようにしたいと考えています。また、東嶺寺を拠点とした歴史的な背景を学び、知ることも重要であると考えており、地元の人々ばかりでなく、観光利用客も招き入れる場所になればと思っています。

この里山公園を多くの方々に親んでもらうために、今後地道な活動を続けながら次世代に引き継いでいくことが将来の目標です。

最後に、七尾市の「底力向上支援事業」、県の「森づくりボランティア推進事業」、「森林山村多面的機能発揮交付金」の支援を受けていることをこの場をお借りして関係各位にお礼申し上げます。

(中能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

森林公園に新たな魅力を



森林セラピスト 坂本美津子 さん

津幡町の森林公園が森林セラピー基地に認定され、昨年の4月にグランドオー

ブンを果たしてから、もう一年余が過ぎました。これまで、様々な体験プログラムが行われ、昨年度は全部で260人余りの人が体験されています。

そこで、このセラピープログラムの開発や、体験活動の実施を中心となって担っていらっしゃる森林セラピストの坂本さんにお話を伺いました。

森林公園はスマートフォン
森林セラピーはアプリ

坂本さんはかねがね、森林公園で「新しい形での体験」を提案できないかと思っており、それがそもそも、森林セラピーに取り組んでみようと思ったきっかけだそうです。

森林公園には、ほかの全国のセラピー基地とは違って、都市部から近いという特徴があり、

金沢から車なら数十分で気軽に来ることが出来る。

そして、森林公園には、たくさん魅力がある。多機能なところだと。例えて言えば、スマートフォンみたいなもので、そして、森林セラピーはアプリなんだと。動物達と触れ合える場所や、ゴルフ場なんかもアプリ、そしてそのひとつがセラピーだ。こう考えるとわかり易いのではないのでしょうかとのことでした。

セラピーのメニューには現在どんなものがあるのか？

基本的なものとして「セラピープラス」があります。基本的なセラピーのメニューに、食事や、ヨガなど、何かプラスして体験してもらうところから名づけられたそうです。

この名前は石川県の森林公園オリジナルのもので、インターネットで「セラピープラス」と検索すると、森林公園が出てきます。

そのほかにも、子供向けに「セ

ラピーアクト」というメニューをつくられ実施なさっています。アクトはact、行動です。今年からは、「セラピーユアーズ」というメニューを提供されています。

これは、自分の好きな時間に、やってみたいメニューから自由に選んでもらって、体験してもらうものです。あなたの為にメニューをカスタムして行いますといったところでしょうか。

坂本さんの森林セラピーのイメージは、名前が内容を表している、それぞれ意味があるわけですか？

森林浴と一般的な旅行を比較すると、森林浴のほうが、ストレスホルモンが劇的に下がるといふ科学的な知見があるそうです。一般旅行だけでは、ストレスの解消にならないばかりか、かえって、ストレスをためることもなかりかねないと。

ですから、たとえば、石川県に観光に来てもらって、最後に

短時間でいいから森林セラピーを体験してもらうことで、心も体もリフレッシュして帰ってもらえるようになる。こんなことが出来たら良いと、また、今、新幹線も開業しましたから、いずれ、首都圏方面からのお客様も来ていただけるとうれいすねともおっしゃっていらつしやいました。

「石川県森林公園」では、今年も様々な森林セラピーのメニューを実施しています。

興味がおありの方は、ホームページに内容が詳しく乗っていますので、ぜひ、「森林セラピープラス」で検索してみてください。

(県央農林総合事務所森林部)



ヨガ

この人に聞く

林業応援団を増やしたい！



●「もりラバー林業女子会@石川」って？

全国に17団体ある林業女子会は2011年京都で始まり、わたしたちはその7番目として、2013年2月に発足しました。林業に関わる女性の集まりではなく、山仕事をするのでなく、「木が好きで森が好き。この大切さを正しく伝え、今私たちにできることからやる」とボランティア仲間と木を題材とするクラブ作家さんら4人でスタートした林業素人の女子会でした。山や木に関心を持ってくれる人を増やすため、「楽しい・カワイイ・おいしい林業」をテーマに、「間口を広く、ハードルは低く」どんなことでもきっか

けになればいいなと活動しています。

●どうして「林業×女子会」なのですか？

林業は生活に密着した大切な産業なのに、仕事を目にするとも少なく口に入るものでもないので、どこか「関係ない」って思っている人が多いと感じていました。お水も、お米も、畑も、魚も全部山からの恵みで育まれている。「関係なくない」と知ってほしい」という思いが強くなりました。女性は母となり産み育てます。主に家の中を取り仕切るのも女性。女性が変われば世の中が変わる。女性が女性に伝えることで伝わる言葉がある。と、女性をターゲットとし女性にわかりやすく親しみやすいテーマで活動することに決めました。

●具体的にどんな活動をしていますか？

例えば、まず森を好きになってもらおうと遠足に出かけます。

もりラバー林業女子会@石川 代表 砂山亜紀子さん

「女性一人では興味があっても山に出かけられなかった」という人が「女性ばかりだから」と参加してくれて、「楽しかったので」と翌年お友達を連れて来てくれます。女子力100%の力です。「アロマだって林業だ！(アロマオイルのブレンド)」「カホンプロジェクト(南米の太鼓カホンを作る)」「おいしい林業(キノコ・山菜・ジビエ・薪ストーブクッキング)」というイベントでは、本来の目的は別にあつただろう人たちが「来てみたら林業の話だった」と言っ、そこから違う回にも参加してくれることがあります。

●今後について教えてください

昨年、初めて本職の林業従事者の人たちと協力して「キ☆コレ〜キコリノシゴトコレクション」というファッションショー

を堅町のメインストリートで開催しました。衣装を見せるファッションショーとは違い、林業の仕事を通りすがりの関心のないう人に魅せることを目的に、普段通りの汚れた作業服姿でレッドカーペットの上を歩いてもらいました。たくさんの方が足を止めて見てくださり、観客には新鮮な驚きを、出演者には知ってもらおう喜びと刺激を感じてもらったことができました。ありがたいことに「今年も見たい！出たい!!」という声が多数あがり、10月2日(日)金沢駅鼓門下で開催する予定で準備をしています。こうして「まず自分たちが楽しみ、できる人ができる時にできる事をする」もりラバーは78人になりました。少しずつ林業の事を知り、ジブンゴトとして自らの言葉で発信する林業応援団を増やしていきたいです。

もりラバーのFBhttps://www.facebook.com/morilover2013/ もりラバーのHPhttp://morilover2013.wix.com/morilover (県央農林総合事務所森林部)

この人に聞く

健やかな松林を次世代の子どもたちに



右側奥から荒田会長、北村事務局長

能美市根上地区で松林の保全活動に取り組んでいる、いしかわ「能美の松原」サポートクラブが、今年7月に全国森林病虫

獣害防除協会が主催する平成29年度森林病虫獣害防除活動優良事例コンクールにおいて協会会長賞を受賞しました。

同クラブの会長荒田正信さんと事務局長北村共二さんにお話を伺いました。

○活動の取り組みのきっかけはどのようなことでしたか
ご承知のとおり、地域の松林は私たちの先祖の努力により育てられ、日本海からの強い風や飛砂から地域を守ってきた大事

な森林です。

この地域の松林が平成15年頃から、松くい虫の甚大な被害を受けました。

この時、初代会長の菊田晴夫氏の呼びかけで、地域のライオンズクラブの会員と地域の住民が力を合わせて松林を守るべく、いしかわ「能美の松原」サポートクラブが立ち上げられました。

○どのような活動をされているのですか
私たちは、恒久的な松林の存続を願い、松林の保全に取り組む方々のサポートや、未来を担う青少年に松林を守ることへの理解を深める活動に取り組んでいます。

能美市立浜小学校では、松林の大切さを働きかけたところ、「はまなす緑の少年団」が結成され、小学生が松林保全活動に取り組んでいます。能美市立根上中学校では、校長先生や先生方にもご理解いただき、生徒会からなる「松タレンジャーズ」が結成され、年間5回位、松葉かきや除草活動などに取り組ん

いしかわ「能美の松原」サポートクラブ

でいただいています。

また、県農林総合研究センターの指導を得て、松葉から堆肥をつくるという資源循環型の取り組みにより、松林の有効活用を図っています。この堆肥は水稲をはじめ各種畑作物との相性がとてもよく、かつ雑草の発生も抑制され、有機農業のモデルにしたいと思っています。



地元浜小学校生徒による植樹体験

○根上方式の松林再生とはどのようなものですか

針葉樹を原料とした特製の木粉炭をクロマツの苗木の根に直接施用し植栽する方法で、活着率が非常に高く、実績がでてい

ます。

平成27年に能美市で開催された「白砂青松再生の会 能美大会」でも、根上方式を報告し、全国から訪れた関係者にアピールしました。

○今後どのように取り組んでいこうとお考えですか
これまで、地域の松林を再生したいという一心で取り組んできましたが、現能美市長の井出敏朗さんや県からのサポートなど様々な方のご理解、ご協力によりここまで来ることができました。

私たちは、地元の小、中学校の子どもたちに松林保全の啓発に取り組んできましたが、やはり、これからもさらに多くの子どもたちにこの活動を理解し、体験してもらうことが重要と考えます。子どもの頃の経験は大人になっても忘れません。これからも青少年への松林保全を通じた環境教育をさらに広げるよう努力していきたいと考えています。

(南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

千里浜海岸を守る地域住民によるクロマツ林再生活動について

千里浜地区まちづくり協議会 会長 越野 兵司さん



はじめに 千里浜 海岸に沿って広がるクロマツ林は約300年前から植樹され、吹きつける潮風と飛砂から地区を守る役目を担ってきましたが、近年は、松くい虫被害等により減少し、防風・飛砂防備機能の低下が懸念されてきました。このような中、千里浜地区まちづくり協議会は、平成18年4月より地域住民による森づくり活動と森林環境教育の推進に取り組み、平成28年には、いしかわ森林環境功労者表彰、同年10月には全国育樹活動コンクールで『国土緑化推進機構理事長賞』を受賞し、功績が高く評価されています。

私の子供の頃、クロマツの落葉や枯枝は、肥料や火持ちが良いため家庭用の燃料として利用されておりました。自分もよくその採取を手伝ったのを覚えています。そのため、林内はクロマツの好む肥料分の少ない環境が保たれていました。しかしながら戦後は、その利用が減り、徐々に落葉や枯枝が積み、やせ地を好むクロマツの生育環境が損なわれていきました。また、松くい虫を原因とする松枯れによって「青松」の林という美しい景観が消失していくことに胸を痛めていました。

「これまで取り組まれてきた内容について」
平成10年3月に高校の教員を退職したのを機に、クロマツ林の再生を願い、各種勉強会への参加や関係機関への働きかけを始めました。平成17年に羽咋市千里浜地域に居住する個人・団体を会員として、「住民相互が支えあい心豊かな町づくりを行う」とことを目的として「千里浜地区まちづくり協議会」が組織されました。また、同協議会では、平成18年4月からは、同協議会が活動の一環としてクロマツ林の保護と再生を目指す整備活動を始めています。私は当初



植樹活動

「取り組みを行うなかで工夫されている点について」
日曜日に活動することが多いので、地域住民の親睦も兼ねて、軽食も交えて行っています。また、植樹の際に、参加者が円滑に作業できるよう、事前に植穴掘り、竹支柱設置等の準備を行っています。

「今後の抱負について」
幸いこれまでに植栽したクロマツは順調に生育しており、今後も当地区まちづくり協議会は、クロマツ林再生活動を、植樹を中心に今後も継続していきたいと思っております。先人が長年にわたって守り続けてきた千里浜のクロマツ林を、将来、植樹を行った小学生が家庭を持ち、再び一年生と親子として参加するよう、な息の長い活動として受け継いでいければと思います。

また、地域住民自らが森林整備を行う他の団体とも連携を取りながら、より取り組みを活性化させるとともに、自らの地域を活性化させる新たな仲間が他にも生まれることを期待しております。

から、その責任者として携わっており、クロマツ林の大切さを後世に受け継ぐための教育活動も行っています。具体的には、毎年4月に羽咋小学校に入学する千里浜地区在住の新1年生にも参加してもらって「クロマツ記念植樹」を企画し、クロマツ林と子供たちが共に元気に成長することを期待して、毎年100本ほどのクロマツを植樹しています。本年度も14回目の植樹活動を昨年4月7日に行いました。

この人に聞く

鞍掛山と共に歩む賑わいづくり

石川県の南部にある「鞍掛山」は、小松市と加賀市の境界にあります。ふもとから見ると山に鞍を掛けたような形をしていることから、鞍掛山と呼ばれています。この鞍掛山をフィールドに活動されている「滝ヶ原町鞍掛山を愛する会」の会長である山下豊さんに、お話を伺いました。



山下 豊さん
(バックは登頂した各地の鞍掛山の新聞記事)

○「滝ヶ原町鞍掛山を愛する会」(以下、愛する会)はどのような経緯で設立されたのですか。

鞍掛山への登山者の増加に伴い、登山道の整備や動植物の保護に対応するため、平成9年に設立しました。「安全・健康・環境」をスローガンに掲げており、会員は80名程度です。

○「愛する会」ではどのような活動を行っていますか。

主な活動としては、
①登山道周辺の整備として、草刈り・除伐・動植物を保護する環境づくりを行っています。このような活動の成果もあってか、年間1万人を超える登山者が訪れます。

②全国に21箇所ある同じ名称の「鞍掛山」を会員で登山しています。19年の歳月をかけて21山すべて制覇し、現在は2巡目に入り、各地の「鞍掛山」を守る人たちとの繋がりができました。

③登山口近くでビオトープ「トンボの楽園」を整備し、ハッチョウトンボやホトケドジョウといった希少な動物を保護しています。小学生を対象に観察会をここで実施するなど、生息環境の大切さを伝える活動を行っています。

④ボランティアガイドを育成しています。鞍掛山の魅力や安全な登山方法を普及啓蒙するため、ボランティアガイドの養成講座を実施しています。

○「愛する会」を継続していく中で、苦労していることはありますか。

滝ヶ原町鞍掛山を愛する会 会長

会員の平均年齢が60歳と高齢化が進んでいます。登山道整備には体力が必要となり、人手が足りないこともあります。このため、後継者の育成を進めています。



滝ヶ原町から望む鞍掛山

○鞍掛山の魅力を教えてください。

3月以降、春の訪れを告げるマンサク、タムシバ、ミツバツツジ、ヒユウガミズキの花が咲きます。準絶滅危惧種のギフチヨウモ見られます。6月にはササユリが咲き、7月にはナツツバキの白い花が咲きます。秋にはナツハゼの黒い実やナナカマドの赤い紅葉が見られます。このように四季を通じて美しい植物が見られ、貴重な動物も生息しています。

動植物を観察しながら登山し頂上にたどり着くと、360度見渡せる大パノラマが広がります。

山下 豊さん

す。頂上からは、白山や加賀平野、日本海、金沢の街まで眺めることができ、登頂の達成感と絶景を味わうことができますよ。

○登山者には、どのようなことに気をつけてほしいですか。

安全面やツキノワグマに気をつけて登山をして下さい。登山口には登山届のポストが設置してあるので、活用をお願いします。動植物は採取せずに撮影するだけでとどめ、五感で楽しんで下さいね。



鞍掛山登山口 (滝ヶ原町)

○これからの目標を教えてください。

鞍掛山を含む滝ヶ原周辺には様々な地域資源があります。これらの資源を生かし、スローツーリズム等により魅力を発信するとともに、交流人口の増加を図り、地域の賑わいづくりにつなげていきたいです。

(南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

森林公園の魅力伝える森の案内人

石川県森林公園インフォメーションセンター長 内藤善太さん

本州でも有数の面積を誇る石川県森林公園（津幡町）は、開園以来多くの県民に利用されています。

今回は公園内にあるインフォメーションセンター「わくわく森林ハウス」にて、センター長として、また公園のガイド役として活躍されている内藤善太さんに、お話しを伺いました。

○森林公園で働くきっかけは？

元々は金沢市の事務系職員として働いていましたが、子供の頃から自然に触れることが好きで、当時からいしかわ自然学校やNPO団体で実施する自然体験イベントなどの手伝いに、ボランティアとしてよく参加していました。

それらの活動を通じ、段々と自然と関わり、その魅力を多くの人に伝える仕事がしたいと思うようになり、そんな時にちょうど森林公園のインフォメーションセンター長の募集があり、縁あって平成25年4月より働く

ことになりました。

○どういった仕事をされていますか？

センター長として全体の統括のほか、森林公園の魅力を生かした自然体験や、石川県で唯一のプログラムなどを企画し、実行しています。

現在は年間約50回のプログラムやイベントを開催し、延べ千人ほどの方々にご利用をいただいているところです。季節に合わせた定期的なプログラムのほか、ツリークライミングやノル



親子で参加できる自然体験プログラムガイドとして公園の魅力を伝えます

ディックウオークなど新しいプログラムも取り入れ、安全に十分配慮しながら、子供から大人まで、多くの人が森林公園の魅力を感じ、楽しめるよう工夫しています。

また「わくわく森林ハウス」館内の展示等にも力を入れており、訪れた方が森林公園に興味を持ち、何度も足を運んでもらえるようにと考えながら企画しています。

○森林公園の魅力や今後の展望は？

この森林公園はありふれたいわゆる代表的な里山でありながら、豊かな森林の中で身近な生物の世界の面白さを知ることや、五感を通じて森林の癒し効果を感じることができるなど、非常に魅力のある公園です。私自身、もう何年もここで働いていますが、いまだ興味が尽きず、日々新しい発見があります。

身近なところにこういった場所があること、またその魅力を

体験プログラムや森林セラピーを通し、多くの方に伝えていきたいと考えています。

今後はさらに森林公園の魅力を発掘し、それを人に伝えられるプログラムの企画に生かしていきたいです。

また、公園内のウォーキングなどを通し、地域の方の健康づくりや交流の場として「わくわく森林ハウス」を利用してもらうなど、日常的に森林公園を訪れる機会が増えるような企画も考えていきたいです。



内藤善太さん

(県央農林総合事務所森林部)

この人に聞く

森の中の保育園で体験を通して学び育つ

神杉保育園 園長

かみすき
神杉 充 さん

穴水湾を望む穴水町中居地区から、丘の上の寺院群を抜ける石畳の散策路（通称「さとりの道」）を進んでいくと、森の中に煙突が付いた山小屋のような雰囲気的神杉保育園が見えてきます。

ここで、「遊び・体験」をテーマに保育園を運営されている園長の神杉充さんに、お話を伺いました。



神杉充さんと園児たち

○神杉保育園の特徴を教えてください。

【3つの「つばみ」(心、学び、味)を育てる】を園の方針に掲げ、子供たちが「遊び」を通して様々な体験をできるように、音楽教室や地元の食材を使った食育、能登の里山の自然を活かしたプログラムを提供し

て、「知的好奇心の刺激・読解力の涵養」を目指しています。

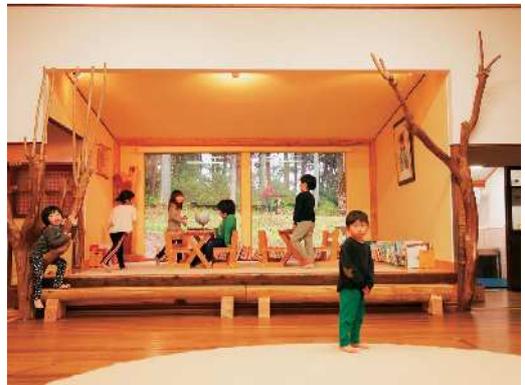
○森や自然と触れ合う活動について教えてください。

当園は、周りをスギやアテの林に囲まれていて、さながら「森の中の保育園」のような空間です。園の窓からは針葉樹の緑が見え、時々野生のキジが横切ったり、夏になるとカブトムシが飛んできたりします。

そして、ホールの窓際には、自然の光の中で読書ができる絵本のコーナーを作り、「森の絵本館」と名付けて絵本の読み聞かせや「絵本フェア」を開いています。読書をする習慣はとても大切だと思います。

現在、園には、0歳から6歳まで26名の子供たちがいますが、「森の絵本館」では1歳の子も年上の子と一緒に絵本を開いて見えています。

冬になると、薪ストーブの炎を見ながら暖をとったり、ピザ窯でピザを焼いて食べたり、子供たちは五感



「森の絵本館」入口のサルスベリが森の雰囲気を演出

を使いながら「木と火のある暮らし」を体験することができます。

○建物に使われている木材のことを教えてください。

子どもたちが触れる場所にはできるだけ木材を使いたいと考えています。フローリングや園の外壁に県産スギ等の木材を使っているほか、机や椅子も木製のものを使用しています。

室内はリフォームしましたが、昔の園舎で使っていた玄関の扉はそのまま残しています。卒園児が今では親になり、子供を預けに来る時に懐かしく見ることが出来ます。

○神杉さんがこの園で子供たちに伝えたい事は何ですか。

私達が生きていくために必要な「食べ物」、「楽しみ(遊び)」の多くは、周りの自然が与えてくれるものです。

子どもたちには、この園での体験を通じて、「自然を大切にしよう」という心を育んで欲しいと思っています。

〈編集後記〉

穴水町中居地区は、かつて鑄物の産地として栄え、町内には9つの寺院や樹齢750年と伝わるフカンマキ(町指定天然記念物)が生育するなど、能登の歴史を感じることが出来ます。

(県奥能登農林総合事務所森林部)



令和4年秋に園の外壁を県産スギで改修

この人に聞く

地域エネルギー資源の活用を目指して

「白山しらみね薪の会」理事兼事務局長 風 一さん



平成25年
3月3日に
白山市白峰
地区の住民

グループが中心となり、環境保全と地域エネルギーの資源の持続可能な利用”を目指して、市原あかね金沢大学人間社会学域教授を会長とする「白山しらみね薪の会」が設立されました。今回は理事兼事務局長の風一さんにお話を伺いました。

白峰地区では、平成19年からNPO法人白山しらみね自然学校を中心に、住民グループが地元企業や金沢大学と共に「白山自然エネルギー利用研究会」を立ち上げ、白山麓の地域資源を活用し、再生可能エネルギーの導入の事業化と山村地域の活性化を目指して研究調査活動を行ってきました。当地区は豪雪地帯のため、雪の重みから家屋

を守るための屋根雪おろしが必要ですが、とても危険な重労働です。近年は過疎・少子高齢化の影響で屋根雪融雪装置を設置する世帯が増えていますが、石油価格の高騰もあり燃料費が大きな負担となっています。東日本大震災以後、再生可能エネルギーが注目され、農業用ハウスの加温や薪ストーブの燃料として、薪を主とした木質バイオマスの利用が県下で増大しており、地域内においても薪ストーブの使用者が増えています。一方、地域には間伐・更新伐施業地の残材や林業・作業道等の開設時に発生する支障木など、未利用の木質バイオマス資源があり、これを活用できればコスト的にも、そして、何より地域の環境保全にもなります。その第一歩として「薪の会」をスタートさせることにしました。

活動内容はどのようなものでしょう。

会員は薪ストーブ使用者やこれからの設置予定者を中心に白山市内外に約20名います。活動は薪の生産を主体に森林レクリエーションや環境教育といった場の提供と併せて体験型の交流活動として年間5回ほど実施していく予定です。薪の生産にあたっては、地元の林業事業者から間伐材を中心に仕入れ、会員や地域の住民だけでなく、域外から森林ボランティア活動や学生インターンシップ事業などを通して協力者を募ります。生産した薪は屋外で乾燥し、希望者には宅配したいと考えています。また、薪の要望は多様なため、原木の種類や薪の長さなど細かいニーズに対応できるようにしていきたいと考えています。販売は、ガソリンスタンドならぬ薪スタンドの設置を計画しており、薪を燃やしたあとの灰の回収も行って、農業用肥料として利用したいと思います。

今後の展望について聞かせて下さい。

かつて白峰には厳しい冬を乗り切るための高度な知恵や薪炭利用技術がありました。その伝承の機会はどんどんなくなっています。持続可能な資源利用の知恵や炭焼き技術、自然と共生する生活文化を現代の生活に生かすことを実践していきたいと思います。金沢大学等の有識者の知見をいただきながら、いずれは木質バイオマス燃料（薪・炭）を利用した環境への負荷が小さい屋根雪融雪装置の実用化を目指し、エコな地域づくりで白峰を活性化させていきたいです。

ありがとうございました。

白峰で造園業を営む風さんは「薪の会」の他にも、白山麓でわさび栽培に取り組み、わさび漬やドレッシングなどの特産品販売にも力を入れています。地域振興に向けてさらなる活躍を期待しております。

(石川農林総合事務所森林部)

この人に聞く

能登町「当日夢を語る会」の取り組み

当日夢を語る会 会長 向峠 智隆 さん



能登町当目は奥能登の中心部に位置し、猿鬼伝説や

平家の落人伝説が伝わる自然豊かな地域です。地域の活性化に住民有志が自ら取り組むグループ「当日夢を語る会」の会長向峠智隆さん、副会長谷口文夫さん、事務局の修田勝好さんにお話を伺いました。

○「当日夢を語る会」について

当会は平成24年11月に当目の住民全体（当時94世帯、245名）を会員として発足しました。旧柳田村にかつて7校あった小学校は現在1校になり、当目でもここ数年空き家が目立ってきました。このままだと「限界集落」になるという危機感から、今何か手を打たなければならぬと考へてのことです。

○会の活動は

当目は、昼夜の寒暖差が激しく、飲料水にもなる山からの冷たい水が豊富で、昔から美味しい米ができることです。そのため、まずはこの米を地域の特産品とする取り組みから始めま

した。先進地のブランド米と差別化を図るため、安心・安全なお米と地域の魅力をセットで販売することにしました。具体的には生活排水の入らない清流で栽培すること、年間100キロ以上の米を購入してくれたお客様を「特別住民」として、農業体験への招待や地域の特産品を定期発送する「特別住民制度」の導入です。

また、石川県立大学のサークル「援農隊あぐり」と提携し、ブランド化や情報発信、パッケージの作成など若者の視点を交えて取り組んでいます。今年度は特別栽培米や有機JASの取り組みも始め、顧客も増えています。

今年度からは能登半島地震復興基金の補助事業を活用し、耕



耕作放棄地



フキ栽培に活用

作放棄地を開墾しフキ栽培も始めました。地域のお年寄りや女性が無理なくやりがいを感じながら働ける場を作るためです。

さらに、薪の生産も試験的に始めています。若い人が定住するためには、農業を上手く組み合わせ、収入が確保できることが不可欠です。このため、豊富な森林資源を活用できればと、地域の山から買い取ったナラ材を薪に加工する取り組みをしています。使用していない薪割り機を住民からレンタルし、廃校になった小学校の体育館を町から借り受け、そこで作業しています。これまでに14トンほどの材を購入して、薪にするための1日1人あたりの生産性やコスト、収益性などを試算しています。今後はこれをもとに出来高

に応じて作業に従事した住民に賃金を支払う仕組みにしています。今年度はスタートの年でもあり、材は購入しましたが、来年度は自分たちで山から

材を伐り出して調達する計画をしています。

○今後の展望は

当会のメンバーは定年を迎えた60代が中心です。将来にわたる活動を継続していくためには、補助金や人的支援が受けられる今のうちに組織としての体力をつけ、自立できるように後継者を育成しなければなりません。自分たちが中心となって動けるここ数年が勝負だと思っています。この取り組みを始めてみて感じたことは、一人ひとりそれぞれが得意分野や農林業の経験を持っており、貴重な人材が地域に豊富であるということです。

また、学生さんが田植えや草刈りなどに参加してくれることで地区にもにわかに活気が出てきました。作業場の土間張りも、住民からの出資と地元土建会社の支援を得て自力で行いました。機械や資金などまだまだ課題はありますが、多くの方の知恵を借りてより良い地域づくりに末永く取り組んでいきたいと考えています。

ありがとうございます。

地域の将来を見据え、強い思いで地域の活性化に取り組む「当日夢を語る会」の活動を事務局をあげて応援していきたいと思ひます。

(奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

小松市の基本構想は3活

小松市 環境共生部
担当部長兼農林水産課長 山本哲也 さん



昨年5月に開催された第66回全国植樹祭のメイン会場となった小松市の農林水産課にお話を伺いました。

小松市では「こまつフォレスト協議会」が立ち上がったとのことですが、その内容は…

全国植樹祭の開催を契機に、市民に高まった意識を健全な美しい森づくりにつなげることを目的とし、森林の有する多面的機能が十分に発揮されるよう「循環型森林保全」を目指しています。

産学官が一体となり環境と共

生するスマートな街と人を次世代へ残すための基本構想を策定すると共に新たな森林資源の活用策の検討を行います。

こまつフォレスト協議会のテーマは、①木活（木が活き）・②森活（森が活き）・③人活（人が活き）で、木を使い、森を守り、林業を支える人づくりをキヤッチフレーズにしています。

基本構想の策定を進める中でアンケートも行われたと聞きましたが…

森林所有者7,367名に対し、所有森林の面積や後継者の有無、今後の経営意向等の課題などの意見を頂き、構想策定の基礎資料として活用していく計画です。

特に今回のアンケートでは、宛先不明者が全体の12.9%もあったことに驚いています。過疎や高齢化の要因も重なり、市外へ転出された方の中には小松市に

今後の小松市の林業の取組方針について教えてください…

小松市の豊かな森林資源の保全と利活用を目指し、林道開設や緩衝帯、市行造林等の森林資源を保全することはもとより、かが森林組合や各町林産組合との連携をより一層強化していくことが必要だと思っています。

また、「環境王国こまつ」として再生可能なエネルギー資源である木質バイオマスの活用等を通じて環境負荷の少ない新たな社会・まちづくりを目指すため、地域住民やSATOYAMA協議会、水郷2020などの関係団体との関係を密にして森林・林業に携わることが市の農林行政の責務と考えています。

(南加賀農林総合事務所森林部)

この人に聞く

地域住民の感謝を励みにイノシシの捕獲活動を行う

浦 啓一さん



浦さんが捕獲したイノシシ

イノシシの捕獲名人と言われる浦啓一さんは、10年前まで輪島市役所に勤務され、在職中は農林水産、下水道、都市整備課長や建設部長を歴任されてきました。

浦さんがイノシシを捕獲するきっかけとなったのは、地元集落の水田約4.5haにイノシシ被害が発生し、自らの水田も被害に遭うなど被害が拡大してきたとのことで、2年前に「わな」の狩猟免許を取得され、捕獲を始めることになったそうです。以前から狩猟の知識があった訳ではなく、特別な指導を受けた訳でもなく、狩猟免許を取ってから猟友会の人に何度か聞いたそうです。主に県のマニュアルで捕獲方法を学び、自分で考え

て実践しているだけだそうです。捕獲作業は、基本1人で行っており、檻の運搬など人手が必要なときは友人に手伝いをお願いするそうです。

現在、5基の檻を設置管理しておられ、これまで約100頭のイノシシを捕獲されたそうですが、あと2基設置できれば自分の廻っているエリアを効率的にカバーできるとのことです。

約2年間で、数々の捕獲を振り返って頂くと、一度にイノシシを6頭を捕獲したのが最高で、3、4頭は何度もあるそうです。時には朝、餌をセットし昼には数頭が入っていた事もあったそうです。比較的夜に活動するとのことですが、昼でも行動しているそうで、電気柵を終口通電していなければ効果がないとのことでした。

捕獲で意外だったことは、捕獲確認の写真を撮影中に檻の中のイノシシが檻の上の穴（錯誤）捕獲防止のためクマなどが脱出できるように設けられた穴）から逃げ出してしまったことで、予想もしていなかっただけに悔やまれると苦笑されていました。

浦さんに、沢山捕獲する秘策を聞くと、「特別なことは何もやっていない。ただ、マニュアルに書かれているとおりにやっているだけ」とのこと。「餌に特徴があるのですか」とたずねたところ、餌は米糠で一切混ぜ物はなく、1度芋を混ぜてみたところ全く食べずに残っていたそうです。他者では、米糠に酒粕や芳香剤を混ぜる人がいると言っていました。

イノシシ捕獲の思いは、「地域の人から感謝の言葉を言われた時が一番うれしく、ガンバロ〜とやりがいを感じる」と話していました。

最後に「捕獲檻を設置したら毎日の見回りを欠かさず、檻周辺の足跡やエサの食跡などの変化を確認することが大事」とアドバイス頂きました。

「地域の住民は、捕獲名人の浦さんがいてくれて安心ですね」

浦さんには、これからも怪我等のないよう健康で、地域のためにイノシシ捕獲に頑張ってくださいと思います。

（奥能登農林総合事務所森林部）

この人に聞く

山芋掘り35年のベテラン！

能登町(旧柳田村) 大井 茂 (59歳) さん



里山には、た快感がやみつきになり、それを楽しみの季節が2回あると思いき「春は成長」で「秋は収穫」です。秋の味覚の代表には松茸もありますが、山芋(自然薯)を忘れてはいけません、今回は山芋を掘る名人の方を訪ねて話を聞かせていただきました。

○きっかけ

能登町(旧柳田村)在住の大井茂さん(59歳)です。以前は、町役場や春蘭の里の事務局に勤め現在は、能登町の集落支援員として活躍しています。

大井さんが山芋掘りを始めたのは、25歳の時に、山芋掘りの名人であった師匠の叔父が体力がありそうなので芋掘りに向いているのではと誘われたことがきっかけで、教えられるがままに山芋を折らずに掘りあげられ

た快感がやみつきになり、それを楽しみの季節が2回あると思いき「春は成長」で「秋は収穫」です。秋の味覚の代表には松茸もありますが、山芋(自然薯)を忘れてはいけません、今回は山芋を掘る名人の方を訪ねて話を聞かせていただきました。

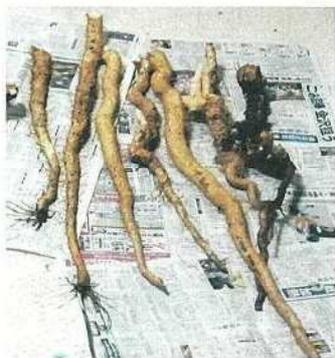
掘り始めて15年間くらいは、師匠と競争するように掘っていましたが、師匠が引退した後は一人で山に入り、持ち前の体力と根気で現在も掘り続けています。

○こだわりの道具と収穫

山芋掘りと収穫場所へのこだわりは、他の人は色々の道具を持って行くそうですが、大井さんは、普通のスコップをグライндターで刃先を木の根などを切るようにしたものを1丁だけ持って行くそうです。このスコ

○山芋の食べ方

掘りとった山芋のほとんどは贈答用に使い、それ以外は友人との会食等に使うそうです。ここでおいしい食べ方について教えてくださいました。すりおろした生のトコロも美味しいですが、この時期は狩猟解禁と重なり、キジやヤマドリの出汁にすりおろした山芋を浮かして食べる料理が一番美味しく、4〜5人で一度に5kgがなくなるほど高評で大井家の年中行事となっているそうです。



収穫された山芋(自然薯)

掘り始めて15年間くらいは、師匠と競争するように掘っていましたが、師匠が引退した後は一人で山に入り、持ち前の体力と根気で現在も掘り続けています。

ツブの良いところは、掘り始めの木の根が多い部分や軟岩程度は容易に切れるとの事で大変重宝しているそうです。掘り幅は40〜60cmで縦に深く掘り終わったら必ず埋め戻しをすることが山芋掘り者の最大のマナーであると話しています。

山芋掘りの場所は、自宅周辺の山に10力所くらい見つけてあり、資源の確保のために1シーズンに2力所程度の掘り取りで、年毎に順番に使っているそうです。

能登町には、山芋掘り名人は他にも8人程度いるそうですが、ここ3ケ年はイノシシ被害が増えていることや高齢のため、掘るのを諦めたと言っている方もいます。これからも山芋を収穫しつづけ、おいしく味わっていくには後継者を育成することに加えて、イノシシの対策が重要であると考えています。まだまだ現役で頑張りたいと思います。(奥能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

キノコ採り名人



奥能登は

沢山の野生キノコが生きている自然豊かな土地であり、昔から秋になるとキノコ狩りが盛んに行われています。今回は地元でキノコ採り名人と言われている能登町中斉の笹谷内さんにお話を伺いました。

○商売の傍ら

笹谷内さんの職業は畳屋さんで、20才のころから父親に畳作りを教わる傍ら、秋になると山へ入るのが趣味でした。キノコの知識も自分で図鑑を見ながら覚えたそうです。今までにはいろいろな毒キノコも誤って食べてしまった経験があるようで、ツキヨタケを間違えて食べたときはかなり大変だったそうです。そのおかげで絶対にツキヨタケを間違えることが無いとのこと、ちなみに食感はいいたけのような噛み応えがあり表面は少しぬめり気があり美味しかったそう

です。

○直売所を始める

山梨県に畳を持って行った帰りの富士吉田と甲府にまたがる御坂峠付近にキノコを売っている店があり、繁盛していています。キノコを売って商売になるのなら、能登でもキノコが沢山取れるので地元貢献を兼ねて、商売になるのではないかと思い販売店を始めました。店を始めると近くの人が山から採ってきたキノコを持ち寄るようになり、そのキノコを買い上げて販売しました。キノコは生物なので何日も置いたものは販売できないし、この店に来たら、どんなキノコでも有るをモットーに頑張っています。

○キノコの発生

キノコは、山の上の方ではマツタケ、コノミタケ等が多く採られ、中腹にはシメジ、スベリ(アブラシメジ類)等が多く取れ、くぼ地にはよくジコウ(コウタケ)が取れます。大体採れる個所は毎年そんなに変わったりはませんが、ジコウは少しずつ山



収穫した野生キノコ



直販所「むうぶめんとファーム」

きていたので、自分たちで何とかできないかと炭焼きグループも結成した。また、来年からは田んぼの耕作も7haに拡

の尾根の方に移動していき山の尾根に採れると次の年からは採れなくなるそうです。発生時期はクツタケ(ウスミラサキホウキタケ)が一番早く8月終わりに9月中旬で、その後スベリが出てきて、コノミタケは9月終わりから10月中旬だそうです。同じ野生キノコでも少しづつ時期がずれています。

○ムーブメント(活動)

昔はキノコが採れたと良く言いますが、今の3倍は採れていないと思う。炭や薪を作らなくなり、木を伐採しない山が増えて

大して農山村繁栄の流れに一躍を投じたいと考えている。キノコと米を中心に販売店とする「むうぶめんとファーム」は旧柳田村中斉の珠洲道路沿いに店を構えていて、「73才になる自分にはあと何年出来るかわからない」と言われていましたが、表情にはまだまだ自信があるように見えました。

読者の皆様、今年のキノコシーズンにはぜひ立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

(奥能登農林総合事務所森林部)

能登町中斉 笹谷内 秀雄 さん

この人に聞く

ミツバチと共に50年

石川県養蜂組合 相談役 下橋 芳夫 (83歳) さん (金沢市)

石川県養蜂組合の相談役として現役で養蜂を行っている下橋さんに、養蜂にかける想いを伺ってききました。

いつから養蜂を始めたのですか。

30代前半から始めたので、約50年になります。趣味で始めたのですが、70歳で宮んでいた建築業を引退してからは本格的に取り組んできました。養蜂の一年間のサイクルを教えてください。

石川県では、例年3月中旬ごろから巣箱を温めて餌(砂糖水)を与えはじめます。4月の下旬には新しい女王蜂を育てるための作業(移虫)が始まり、5月中旬には新女王が誕生します。また、この頃から働き蜂の数もピークに近づき採蜜も本格化して、一年で一番忙しい時期を迎えます。その後は8月まで採蜜と花粉交配のためのミツバチの貸し出しを行い、9月に入ると越冬に向けた準備が始まります。どのくらいの数のミツバチを飼っているのですか。

今は4人で一緒に作業してお

り、ピーク時には70群(女王蜂1匹の巣が1群)、約200万匹飼っています。県内ではこれでも多い方ですが、昔はもっと飼っている方もいました。



越冬に必要な蜜が入った蜂の巣

いつ頃、何の花の蜜が採れるのですか。

春先の4〜5月にかけて、百花蜜といってフジやタニウツギ、ウワミズザクラなどの複数の花のはちみつが採れます。石川県の百花蜜は他県のもの比べて味や香りに癖がなく、質が高いと言われています。

5月下旬〜6月にかけてはニセアカシアの蜜が、その後は7

月にクマノミズキ、8月にカラスザンショウの蜜が採れます。ニセアカシアの蜜は水分が少なく、質が高く、クマノミズキはケーキ屋などで好評です。カラスザンショウは水分が多いので扱いが難しいですが、ミツバチの越冬には欠かせません。

昔と今で養蜂を取り巻く環境はどのように変わってきましたか。

私が始めた頃は、普通に育てていけばミツバチの数も増える飼いやすい状況にありましたが、今は天敵の増加や農薬の影響、花の減少などもあり昔と比べて飼いにくくなりました。

そのため、金沢市の湯涌・医王山地域でも昔は10軒ほど養蜂家がいきましたが、今では僅かとなっています。

養蜂を長く続けていくポイントは何ですか。

一つは、元氣な女王蜂を育てることです。女王蜂は寿命が3〜5年と長く、働き蜂を生み続ける役割があるからです。

もう一つは働き蜂が巣に蜜を採れる環境を整えることです。

そのため、女王蜂の巣別れをスムーズに行う巣箱や、天敵であるスズメバチの捕獲装置を自作するなど、様々な試行をしてきました。



スズメバチ捕獲装置がついた巣箱

あとがき

ミツバチの生態を熟知し、富山県からも養蜂の講師として招かれていた下橋さん。様々な道具を建築業の技術を生かして自作しています。観察から生まれたアイデアを形にし、より良い方法を探り続ける探究心こそ、養蜂にかける活力の原点であると感じました。

(県央農林総合事務所森林部)

この人に聞く

宝達山の魅力を支える「宝達山ファンクラブ」

宝達山ファンクラブ代表 橘 英子 さん

宝達志水町の宝達山山頂付近にある町の休養施設「山の龍宮城」の施設管理を行いながら、宝達山でボランティア活動を始めた「宝達山ファンクラブ」代表の橘さん。山を訪れる人達に安心と安らぎを与え、宝達山の魅力発信に携わってきた橘さんにお話を伺いました。



橘 英子さん

※「山の龍宮城」は、地盤の一部が陥没していることが判明したため、令和元年から閉城しており、移転・新築され令和6年にオープンする見通しとなっています。

●「山の龍宮城」の管理を行うきっかけは

「山の龍宮城」は、宝達山に登って来られる方の一休みと展望の場を兼ねて、平成5年に旧押水町が建設したものです。

私がここで働くようになったきっかけは、主人なんです。当時、建物自体は完成していて、旧押水町が管理人を探していたみたい。主人は仕事の関係で毎日のように役場に入っ

りしていたので、求人を知ってたんでしょね。「とりあえずお弁当を持って宝達山に行こう」って連れてこれたんだけど、この眺望に魅せられて、気がついたらもう約30年。あつという間です。

私は「山の龍宮城」のおかげで、沢山のひととの出会いと、良い思い出を頂くことができました。

●「宝達山ファンクラブ」の活動について

もともと主人と宝達山を登山するため「こぶしの路」を作り、宝達山での散策などのイベントを企画していた所、役場の方から「何か組織を立ち上げよう」と発案してくれたんです。それでできたのが「宝達山ファンクラブ」です。

「宝達山ファンクラブ」は、全長4.7kmの「こぶしの路」の整備（草刈り、倒木の撤去、階段の手直し）を行い、年間を通じてイベントを行っている団体です。「宝達山ヒルクライム」という自転車の大会も立ち上げたりもしたんです。

会員は、町内外の方70名くらい所属していますが、お仕事をされている方もいますので、実際に活動しているのは10名程度です。ファンクラブの活動は、皆さんの協力で成り立っています。本当に感謝があります。



ファンクラブ活動は、皆さんの協力で成り立っています。本当に感謝があります。

●「こぶしの路」の楽しみ方

登山の楽しみ方は、自然を感じて、「山の龍宮城」から見える加賀から能登までの眺望を楽しむことなど、人それぞれですね。秋になると紅葉もきれいです。

私も登山が大好きで、大自然の魅力に魅せられて日本百名山にトライしました。

また、「こぶしの路」は、「山の龍宮城」があることも魅力の一つです。残念ながら今は閉城していますが、沢山の人達と出会う場所になっていました。

●これからの活動

秋になると、旅する蝶、アサギマダラが山頂に飛んできます。アサギマダラは、春先は北海道まで北上して、また秋になると南下する旅を続けています。



アサギマダラ

毎年、飛来する蝶の羽に、いつでもどこで、誰が見つけたかをマーカーキングして、移動距離や移動ルートなどを調査しているんです。

今、特に力を入れて取り組んでいるのは、アサギマダラが好むフジバカマの花畑を山頂に作っていることです。フジバカマはとても美しい花を咲かせて、甘い香りがするのが特徴です。皆さんも是非、フジバカマを見ながら、美しいアサギマダラのマーキングを楽しんでみてはいかがでしょうか。

(県中能登農林総合事務所森林部)

この人に聞く

将来の漆器産業を担う人材の育成を目指して

(公財)山中漆器産業技術センター 専門員 呉藤安宏 さん

加賀市は、450年の歴史を持つ全国一の木地ろくろ挽き産地です。当地の石川県立山中漆器産業技術センター(挽物轆轤(ひきものろくろ))



技術研修所(の呉藤安宏さんに木製漆器づくりについて

とお話を伺いました。
○山中漆器について
山中漆器(山中塗)とは、石川県加賀市で作られる塗り物です。塗り物には、「木製漆器」とプラスチック等を主原料とした「近代漆器」があり、山中塗は2つ合わせて全国一の生産高を誇ります。

漆器の産地は、全国に20余りありますが、山中漆器はとりわけ木地師が多く、木地の生産規模も日本一大さい産地として知られています。木目模様を生かし、自然な風合いを表現する山中塗の大きな特徴は、木が育つ方向に器の形を取る(縦(縦)木取り(たてきどり)にあり

ます。これにより、乾燥による歪みが出にくい堅牢な漆器ができあがり、椀のみならず、薄挽きや蓋物などの精巧な仕上げが可能になります。さらに、木材をろくろで回転させながら刃をあて、木地にさまざまな模様を施す加飾挽きにより、山中塗独自の細部までこだわり抜かれた漆器が誕生します。

木地に使う木材は、石川、福井、岐阜などの木材市場から買い付けます。樹種は、ケヤキが7割で、その他トチ・ミズメ・サクラ等を使用し



豎(縦)木取りによる木地挽き

ます。

木地挽きは、輪切りにした原木を木取りして寸法を決め、余分な部分を切り落とします(左上写真の①)。ろくろ挽きで大まかな仕上がりの形状を作ったのち、木地に歪みが出ないように約3カ月間かけて乾燥させます(同②)。木がほとんど動かない状態になってから、外側、内側の順番に仕上げ挽きを行います(同③)。加飾挽きはここで加えます。

その後、下地工程を経て、下塗り、中塗り、上塗りと漆を塗り重ね、蒔絵を加えて完成します。

○県挽物轆轤技術研修所について

当研修所は、平成9年に開設されるろくろを用いて椀や盆など木工品を加工・製造する「挽物轆轤技術」及び「漆芸技術」を専門的に学べる全国で唯一の研修所です。

毎年5名の研修生を募集しており、2年間基礎的な技術を学びます。3年目からは専門コースに入り、2年から3年程度、地元職人の工房で修行しつつ研修所にも通学します。4〜5年目で、地元職人の工房を独立し、自分の工房を構えるのが一般的です。

研修では、木造り、刃物づくり、それに伴う様々な分野を体得しつつ、挽物轆轤技術の習得を図ります。

また、

重要無形文化財「木工芸」保持者(人間国宝)の川北良造所長が、研修生を直接指導してくださいます。



ろくろ挽きの実習をする研修生

加えて、若手木地師の自立を支援する施設として、ろくろを備えたレンタル工房を併設しており、卒業生が技術に磨きを掛けながら挽物木地づくりを行うこともできます。

○さいごに

木地挽きろくろ体験や山中漆器の工程を学ぶ見学コースもあります。ご家族でも体験が可能となっておりますので、木のぬくもりにふれて、山中漆器の魅力を感じてみませんか。少しでも山中塗や木地師に興味を持っていただけた方は、お気軽に当センターまでお問い合わせください。なお、隣接する「山中うるし座」では、様々な企業や作家が手がけた山中漆器の展示・販売も行っていきます。



山中漆器産業技術センターHP

(県南加賀農林総合事務所森林部)